

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊町昔話集

— 大平・新沼・高畑 —

編 武 田 正

飯豊町昔話集

大平・新沼・高畑地区

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
猿 聲	猿 聲	猿 聲	猿 聲	狐 むかし	狐 むかし	舌 切雀	勝 々山	猿 蟹合戦	か おすと狐	馬 追い鳥	テ デッポッポ	オ ットンタカ鳥

29	28	24	20	17	16	11	10	8	7	7	6	5
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
手 なし娘	子 育て幽霊	瓜 姫子	瓜 姫子	狐 女房	狐 女房	狐 女房	ク エンク エンコ むかし	ク エンク エンコ むかし	ク エンク エンコ むかし	桃 太郎	蛇 聲	蛇 聲

67	67	65	62	59	56	51	48	46	37	34	33	31
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

本昔話集は飯豊町大平、新沼、高畑地区の民俗調査を行った際に採集したものである。十分な時間を取り得なかった為に、採集できなかったものも多くあると思われるのでおことわりする次第である。話者の方々に感謝申し上げます。

なお配列は「日本昔話集成」によった。

1 オットンタカ鳥

オットンタカ鳥という鳥は、兄と舎弟と兄弟二人の暮しだったど。そんで兄は舎弟思いで、うまいもの舎弟さ食^かせ食^かせ、われがうまくないものとか、うまくないどこ食^くい食^くいしたど。舎弟の方が根性ギダレなもんだから、

「おれにさえ、こがえにうまいもの食せるもの、兄はまだうまいもの食ってだべ」
て、あるとき兄どこ殺したど。そして殺してみつど、兄はわれよりうまくないものばり食っていでやつたど。そんで舎弟が、

「いやいや、兄がこれほど大切にして呉^くつじやに、くやしい、くやしい」

て、鳴いだど。そして八千八声、オットンタカ鳥で、兄恋しくて鳴くなだど。
八千八声鳴かねど、餌^{もの}食^くね。餌^もとつてる暇ないもんだから、モズカキという鳥
がとつてくれた餌^もを食^くつてゐるんだつて。

(新沼・土屋ひろえ)

2 テデッポッポ

テデッポッポじゃ、よっぱどソッポタカリな子どもだったど。そんで母親と二人で、そのテデッポッポざあ、ソッポタカリなもんだから、

「おれ死んだとき、山さ埋けてけろ」ていうど、川さ埋ける。「ほんじゃ川さ埋けて来い」ていうど、山さ埋けると、こう言うもんだけど。そしていよいよもって母親死んだとき、

「川さ埋けでこい」

ていう遺言だけど。母親の遺言だからって、そんどきばり聞いて川どさ埋けだど。そうすつど大水出て、流つで行ったど。そんで、

デデッポッポ

カカ恋し

て泣くんだど。

（新沼・土屋ひろえ）

3 馬 追 い 鳥

オマンドリざあ、「マオー、マオー」て鳴く鳥だど。

馬車ひきが馬率いて来て、カカどさ、「馬さ水飲ませたか」て言うど、「飲ませた」て、嘘ついたど。そうすつど、その馬死んだそうだ。自分も病氣して死んでしまったど。そのダダも…。

馬の憑りで自分が喉乾いて死んでしまったもんだど。んだから雨降つど、マオー、マオーて鳴くんだど。

(新沼・渡部正義)

4 かおすと狐

狐はかおすが雑魚いっぱい獲ったからか招ばつて行つたんだど。かおすは雑魚とりが上手だったから、

「なじよして獲るもんだ」

て、狐あ聞いたど。そしたば、

「寒じる晩げ、川さ行つて、尻尾を入つで置くじど、そうすつじどそいつさいっぱい付くなだ」

て言うたど。そうすつじど、そいつ寒じて凍^しみたもんだから、ちよつと引っこ抜けねど。そうすつど、

「少々^{しやう}の雑魚、ひんぬけろ」

て言うたげんど取んねがつたど。そして獲らつでしまつたど。んだから人の真似はしねんだけど。

(大平・渡部もよ)

5 猿 蟹 合 戦

猿が柿の種子、蟹がヤキシ拾つて、そしてその猿に取っ換えろつて言わつて、

こんど蟹が種子を蒔いだずだな。そして水撒まいて、

早く芽を出せ

ならざら切るぞ　ならざら切るぞ

て言うて、そして大きくなつて、実みつたどこさ猿来て、なつたもんだし、蟹は登らんねもんだから、自分ばり登つてうんともいだ上に、蟹さぶつつけて痛くしたど。

蟹が泣いっだどこさ、キジなど来て、猿がせめらつじやので、猿が蟹の家さ仕返しに行つたど。そしたら蜂も来たし、いっぱい助太刀に來たど。栗が火所ほどさ隠つで、猿が寒い寒いて火所さ來たとき、猿さはねたど。そして水甕さ行ぐど、蜂に刺さつじやがら、味噌桶さ行つて味噌つけた。そして流しで洗つたれば蟹にはさまっだど。そして逃げて行くとき、ビタ糞あつて、天井に臼うすいて、滑つたときに、つぶさつだど。んだからそがえに悪いごとさんねもんだ。とーびんのと。

(新沼・土屋もと)

6 勝々山

むじな獲つてきて、下げて足手結わえておくもんだ。そうすつじど、じつちや、また狩りに行つたつて。そしてまたキジ獲つて来たど。そして来て、キジとむじな汁作つておけて、また行つて来たど。

そして帰つて来たら、むじなも居ねけし、キジもいねけど。

「じつちや、キジ煮つだから」

なて言わつじやど。そうすつど食つてみたば、しないにもしないにも、とつてもしないど。そうすつど、外に居て鳥あ池の前の木さ止つた、そして啼なつこんだど。

しないも道理 ばばのカイ

て啼つけど。「異なごんだ」と思つていたど。そうして流しなんていうたつて、山の小屋のごんだから、丸太でも並べてあるばりだったべ。異なごんだ、異な鳥あ啼くなあと思つて、流しさ行つて見たれば、流しの下さ骨見えつけど。そうして

見たれば、ばば殺さつて、むじながばどこ騙して、縄といで呉^けろと言うて、ばんちやが米搗きしつた時に、

「といで呉^けつじど、米搗いて呉る」

て言わつて、むじなといでけたば、ばつちやどこ殺してはあ、そして肉食つて、骨カラ流しの下さ投げて、ばばに化けだんだど。そしてキジ煮たの自分ばり食つてはあ、ばば煮て置いだんだど。

(大平・渡部もよ)

7 舌 切 雀

「今日、空ええなあ、じつちや」なて、ばばちやが言うつたて。

「うん、今日は空ええから、おれ、山さ行つて来っかな」

て、じつちやが腰曲げて頭巾^{ずきん}かぶつて山さ行つたつて。そうしてあまりこわい(疲れて)もんだから、一休み休んで、タバコ点けつだつて。そしたれば、チリンチ

リン、チリンチリンで、雀の音したってよ。

「いや、今日は雀のいた日だな。一匹採って行んなあ」

て、そのおじいさんが休んでいだって。そうすつど、おじいさんさ雀がチョコチョコと傍さ来て、バターツと笠で蓋して採ったって。

「いや、採った。ほんじゃ、ばっちやどさもって行つてなあ」

て、じっちや喜んで持^たつて来て、籠さ飼^もつてだ。飼^もつてで餌などは食せてあつたべげんども、ばっちやも空ええもんだから、窓貼^はつかなあて、窓貼^はりしたって。そして窓貼^はりして糊、傍さ置^いつたな、雀が腹へつてあつたんだかして、出はつて糊舐^めたて。

「いや、おれの拵^はつた糊、みな舐^めた。雀に相違^ない。かつづけなもの飼^もつておかんねから、舌切^べつて飛^べばす」

ていうわけで、おばちやが缺^へで舌切^べつて飛^べばしてやつたって。そうすつど、晩方、じっちやが帰^かつて来て、

「おれの飼^もつてだ雀どさ行^いつた。ばば」

て言うたば、

「ああ、おれ拵った糊舐めたから、舌切って飛ばしてやった」
て、そのばっちやが言うたつて。

「いやいや、むごさいなあ。どっちや飛んで行った。ばっちや」
て言うたば、

「そっちの方さ飛んで行ったな」
て、ばっちやが言うたつてよ。

「いやいや、ほんでは明日あかるくなつてから、探ねに行つて来んなね」
て、そのじっちやが次の日になつて探ねに行った。チリンチリンと雀の音すつど。

「ああ、あいつあおれの飼つてだ雀だべがなあ、雀の音だなあ」
て、足止めていだつた。そしてどこからともなく「おじいちゃん」て音がしたつて。そして、

「おれあ雀だぜ、おら家ここだから、来てみる」

て招^よばたど。そしてそのおじいさんが行^いったところあ、いや、きれいな家で
してそこで「いや、おじいさん、来て呉^きるか」て言うもんで、

「おれであつたぜ、雀、舌切らつじやな」

て礼^{れい}釈^{しやく}したつて。

「いや、むごさがつたな」

て。そしてこんど、御馳走してやるていうもんで、いろんな御馳走食^くせて、

「はて、暗^くくなるに、そんがえにいつまでも居^ゐられんめえな」

て思^{おも}つたば、

「じつちや、いまちいと休^{やす}め、踊^{おど}り見^みせてやる」

ていうわけで、雀踊^うり、赤い衣裳着^きて踊^{おど}りおどつたど。面白いにまぎつで、暗

くなるの忘^わせて、じつちやがいただけんども、

「はて、こんどは行^いかんね」

て言うたば、「ほんじゃ、宝呉^きつじえやる」ていうわけで、宝物もらつて来てあつ

たど。そうすつど、こんど家^{いへ}さ帰^かつて来たば、ばつちや、

「何背負つて来たそ」

「雀から御馳走になって、お土産もらつて来た」

「ほんじゃ、おれも明日行つてもらつて来んべ」

て、こういうわけであつたど。

「ああ、舌切つたもの、呉んねべ」

て言うたげんども、

「いや、おれ行つてもらつて来る」

て言うわけで、出かけて行つたど。やっぱり雀の音していたけど。そうすつども、そういう人だから、無理やりに入つて行つたど。大した御馳走もないけという話だけし、雀どら、どこさか一散に隠つて居ねがつたど。そしておつつあまとおつかちゃだけだつけど。そして宝物欲しくてばり行つたもんだから、

「おれにも宝物呉^けんべな」

て、こういうわけだ。

「うん、呉っじえやる、呉っじえやる。重たいな呉っじえやる」

こういうわけで、重たい箱呉っじや。そうすつど、喜んで来たわけだ。家まで来ねうちに開けたくて開けたくて開けたど。途中でよ。そうすつど化物出はって来て、ばっちゃんかからつだど。とーびんがと。

(高畑・斎藤さち)

8 狐 むかし

まいど、狐にテンポでまやかさつだ者はいっぱいたいで…。

おらえの隣のじんつあ、法事さ招ばつで行つて来たつけど。法事さ招ばつで行つて御馳走なつて、酔えて来て、先には道が上であつたから、アカヤスミ場と言うどこ、下から上がりあげつどあつてなあ、そこに清水あつたのよ。そうすつじど、そのじんつあ、苞つつコにもらつて来たど…。

そこさ、狐、ええおかたになつて、「お湯さ入れ」て言わつて裸になつて、お湯

さ入って垢落ししてもらったど、若い女によ。

いつまでも来ねんだし、家で心配して迎えに行つたど。そして清水さ入って、「ええ、ええ」て言うて喜んでいたけど。そして清水から上げて家さ連^せて来たど。家さ連^せて来たげんど、まだ狐抜けないんだか、赤い女ええから、そこさ、また行かんねて、行くどこすんだけど。んだげんど、そいつあ狐に化かさつたのだから、家さ置いて医者につれて行つたど。

(大平・渡部もよ)

9 狐むかし

エノキの旦那、大晦日^{しず}の買物に峠を越えて、白鷹から山形さ行つたど。行くと途中で女出はつて来て、

「おれあ狐だげんども、買物頼まつて呉ろ、また此処に居っから」
て、銭、五円札だか寄こして、買って来て呉ろて言わつて、ニシンだの油揚げ

だの買いに行ったど。そして狐だじもの、錢、本当なんだか嘘なんだか分んねんだしな、その旦那、とにかくそいつで買って来たど。そして自分も大晦日の買物なんだから、みんな買って、奉公人連せて行ったなさ背負せわせて寄越したんだど。そして自分が後から来て、買物頼たのまつだな、どこにいたかと思つて来たらば、やっぱりそこにいたけど。買ったもの置いたら、

「ありがたかった、しあわせだった。おらえの家はこの向うだから、廻つておくやい」

て言わつじやど。そして山ずうつと廻つたれば大きな家あつけど。そこさ行つて御馳走になつていだつけな、余程よつほどもよつて、御馳走になつたりしたんだし、奥の座敷でええ女来てお酌して、誰もいねなだけど。

夜になつたれば、じつちやが札釈しに出はつて来たんだけど。そうすつじど、ナズキ（額）さ宝生の玉巻いでだもんだけど。

「一年もようと狐だ、一年もようじど、そこさ宝生の玉、一つずつ喰付くなだ」
そしてばつちやも出はつて札釈してから引込んで行ったもんだど。その内に、

「竹駒の稲荷さまさお使いに行かんねぐなったから、簀になって呉ろ」

て言わっじやござんたど。そうすつど家の晦日のことなど忘つではあ、簀になつて呉るて言わっじやもんだから、簀になる分にして、それにとんなええ着物きせらつで、こんど、

「明日、馬さのつて出かけらんねなだ」

て、いよいよその明日になつて、馬さのつて出かけつどこだじもはあ。黒馬さのつて、ドウドウ、ドウドウと出だしたずも。

そうしたば、家では来ないもんだから、来なくて困るもんだから、なじよになつていだと思つて大勢で迎えに行つたど。そしたれば峠越えて行つたところに、焼け棒杭さ上がつて、ドウドウ、ドウドウなて、旦那いだつたど。

「なえだ、旦那、晦日でみんな待つてたに、なえだ」

て言うど、

「おれあ、竹駒の稲荷さ簀になつて、位受けに行くどころだから、家さ行かね」
て言うござんたずも。そうしてこんど行かね行かねて言うたたて、狐に化かさつ

で真黒な焼け棒杭さのつて、ドウドウ、ドウドウていたなだから、そいつ連て来てあつたど。

(大平・渡部もよ)

10 猿

聾

むかしあつたど。

じじ一人、娘三人ええの持つたど。んだげんども田いっぱい持つたげんども、田さ水かけべくもないもんだど。

「なじよして水掛けたらええんだか」

て思つていたらば、猿あ来たけど。そしたらば、

「猿、猿、おらえの娘、おかたに呉れつから田さ水かけて呉んねえか」

て言わつたものな。そしたれば、「あまりええ」て言うけあ、猿あ一時に水掛けて呉つただけど、田さ。そうすつど、猿水掛けたから娘呉るといふもんだから、一

番大きな娘呼ばって、

「娘、娘、おれの言うこと聞いて呉けねが」

て、言うたど。「何だべ」て言うたど。

「猿のおかたになつて呉ねが」

て言うたど。「何語つていんべ、おらえのおどつつあま」どかて、わらわら逃げ
て行つたど。

「さあ困つたごんだ。大きな娘、嫌やんだて言うもの、その次の娘だつて嫌やんだと
いうべもな」

て思つて、こんど二番目の娘呼ばつたつて。「おれの言うこと聞いて呉ねが」て
言うたど。猿あ何時いつの何日いつかに来て、日取り決めて行つたんだからつて、そう言
うど、

「猿に水掛けてもらつたがらつて、猿のおかたになつて呉ねが」
て言うたど。

「何語んべ、おらえのじさま、猿のおかたになれつて、おら嫌やんだ」

て、そいつも逃げて行つたつて。

「さあさあさあ、困つたごんだ」

て、じじ、頭病^やみしたどもなあ。

「いま一人の娘、何て言うもんだか、こりや。猿さ何て言うたらええんだか」

どて、心配しつたつてな。そうすつど、また三番目の娘呼ばつて聞いたど。それしたれば、「おれ言うごと聞いて呉ねが」て言うたど。

「何や、おどつつまま」

て言うたど。

「猿に田さ水掛けてもらつて娘呉れつからつて言うて、猿は何時^{いつ}の何日^{いつか}に来るていたから、そんな時までに決めておかんなね。猿のおかたになつて呉ねが」

て言うたど。そうしたら、その娘賢こくて、

「いやいや、おどつままの言うことなど、何でもええどこでない」

て言うたどもな。そうすつど猿のおかたになつて、猿あパカパカと来たずもな。その日決めつだときに。そうすつどその娘、猿のおかたになつて呉つじやつ

たど。

そして嫁^いつて、三月のお節供になったど。春になってよ。こんど、

「餅搗いて背負って行かんね」

て、猿と娘語ったずもな。そうすつど餅搗いて、「何さ入って背負って行かんね」て、猿言うたずもな。そうすつど、「おらえのおどつつあま、重鉢さ入って行ぐど、重鉢くさいって言うも」

「ほんじゃ、鉢さ入って行んか」

「鉢くさいて食ねも」

「ほんじゃ、臼さ入って行んか」

「ほんじゃ喜んで食うべ」

て言うたずもな。そうすつど猿は臼さ入って背負って行つたどこだど。そうすつど娘賢こいもんだものな。臼背負わせて来たどもな。そして途中まで来たところが、里前さ来たらば桜花咲いっただもものな。

「いや、きれいな桜花咲いっただごど。桜花、おらえのじじ、大好きなごんだ」

て言うど、

「んじゃ、おれ折^おだつて来つからな」て、「臼降^おとしてが」て言うど、「臼降として行くと餅うまくなかつど」て、臼背負わせて登らせたど。「この枝か」「その枝でない、いまと天井の上んな、きれいだな」「ほんじゃ、こいつか」

そしてシンポエまで上らせたど。そうすつど枝折つて、猿は沢さ臼がらみ落つて死んだこんだど。そうすつど娘来て、じじに喜ばつたど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

11 猿

聾

三人娘もつてあつたつけど。じつちや田の水見に行つたれば、猿来たけど。煙草喫^のんでたど。そうすつど「じつちや、どさ行ぐ」なて言うたて。

「おれ、田の水かけてくる」て。「おれああんまりこわいから」なて言うたべちや。そうすつど、

「おれ、かけてくれる。じつちや娘持ったが」

「娘三人持つてだ。どれでもええから一人呉れる」

て言うたもんだも。

「いや、これあ言うてみたものの、田の水見てくるんだか」

ていたところが、ヒタヒタヒタと、じつちやの田さ、みな水かけてくれたど。

「いや、これはおえないことしたもんだ。娘呉れるて言うたものの、家さ行つて、なじよなこと語つたらええもんだか」

て来たつたじだな。

「おれ、田の水見に行つたげんども、猿来たけあ、おれ田見て呉つから、娘一人呉ろつて言うけあ、誰か一人行つて呉らんねが」

て言うたべちやえ、

「そつけな猿のおかたになつていらんね」

なて言うけど。

「いや、こんなこと語んねで、猿あ来つから明日行つて呉ろ」

て、こういうわけであつたど。その娘も賢こがつたごで。

「よしきた、親孝行だ、おれ」て言うわけで、一番末子の娘、「おれ行ぐ。じつちや」て、そういうわけであつたど。

「かつけなおかたになつていらんねがら、何か細工して呉らんね」

て、細工したごで、その娘はよ。そうして明日節句だ、餅背負つて行かんね。

そうすつど、「よく来た、餅搗いて背負つて行かんね」て、猿あ臼出して餅搗き始めたど。そしてトリ餅すつどこだつけど。

「いや、取んな。取つど粉くさいつて食ねも」

こういうわけだ。そうすつど、

「ほんじゃ、なじよして持つて行つたらええ」

「臼がらみ背負つて行かんね」

こういうわけだど。そうすつじど、猿が臼がらみ背負つたど。娘は猿子出つたつたど。あんまり美しい花があつたもんだから、背中の猿子の尻、ガリガリとかつちやいだど。そうすつど猿子は泣いだど。

「なして、そがえに泣く」

て言うけど。

「あの花欲しいて言うでソ」

そうすつじど、その猿は、「おれ行つて取ってくる」ていうわけで、臼降ろしそ
うになったど。「臼おろすど、土くさいていうから、背負つて行かんね」

そんで臼背負つて、崖さ上がつど思うと落つで川さぶんぶんと流つてしまつた
ど。

「おれ、一番親孝行した」

て来たけど。そして猿の子放してやつて、親孝行したつていうことだど。とー
びんのと。

(高畑・斎藤さち)

12 猿

聲

娘、やっぱり三人持つて、

「田んぼさ水掛けて呉れたら、三人娘のうちどれでも一人呉れてやる」

て言うど。一番末っ子がやっぱり猿のおかたになった。そしてお節句札に行くとき、

「おらえのじじちや、餅好きだから、餅搗いて背負つて行つて食せたい」

て言つて、猿、搗くど、

「小豆さ入れつか、雑煮さ入れつか」

なて言うど、

「鍋さ入れつど鍋くさい、唐鉢さ入れつど唐鉢くさいて言うから、臼がらみ背負つて…」

て、臼がらみ背負つて行つたど。途中まで行くと、桜の花咲いていたど。

「あの桜の一枝、ぜひと家さ持つて行きたいから折^おだつて呉^くろ」て、「臼おろす

と土くさいて食ねから」て、臼背負ったまま登って、「桜折だつてける」て言つて上がつて行つたところあ、「どれええ」て、猿も木のぼり上手だから登つて行つたわけだ。

「いまちいと、いまちいと、上か」「その上か」て、どこまでも上げてやつたところか、その枝が折だつて落ちて、娘が家さ戻つて来て親孝行したど。とーびんと。

(新沼・渡部勝見)

13 猿 聲

田んぼに水かけた人に、三人娘持つたの、一人呉るというて、水かけてもらつて、家さ歸つて来て、

「猿のおかたになつて呉ろ」

て言うたら、その娘どもら、

「そつけな、何もんぼつでいんべ」

て、親の言うこと二人とも聞かね。一番の末子娘が、親たちの言うこと聞いて、
「おれ、一緒になる、もらわつて行く」

て言うて行つたつて。そして三月の節句札に来つどき、餅持^たがつて行くとき、
「鍋さ入れつど、鍋くさいていうし、そんじゃ臼がらみ背負つて行く以外にない
べ」

て、臼がらみ背負つて来たど。そして桜の花きれいな咲いっだどこで、

「桜の花一枝とつて持つて行きたい」

て言うど、

「おれ取つて呉る」

て言うて、臼置くと思つたら、

「臼置ぐと土くさいて言うから」

て、臼背負つたまま登つたど。「これが」て言うど、「まだ天井^ンな」て言う。

「これが」て言うど、「いまちいと天井^ンな」て言うて、上さあげてやつて、その
枝、ぼいって折^おだつて死んだごでな。とーびんと。

14 蛇 聾

まいど、ばっちやと娘ばりでいでやったど。そうしたばその家さ、夜になつじどええ男来るんだけど。その娘さよ。そうすつじど、ばっちや、不思議などこ見んだんだか、ツムギ、鉢さ取ったど。そいつ蒲団針ぎつちりつけて、

「晩げ、あの男あ来たらば、衣裳の裾さ、これジクジクと縫いつけてやれ」

て教えたとど。そうすつじどその娘あ、じつくりとなんぼ針も縫いつけてやったど。そうすつじど、朝げになつて、そのツムギあずるずると這つて行ったごんだど。そうすつど、

「ツムギ辿つて行つてみる、どこさ行つたか行つてみる」

て、そう、ばっちやに言わつたど。ずうつと行つたれば山さ行つて洞の中さ入つたど。そうして行つてみたれば、ウンウンとうなる音すつけど。その親が言つた

けど。

「んだから人間など賢いから、人間さなど決して行くもんでない。人間さかまつたから、そういう目に会ったんだ」

て言わつでだ音すつけど。そしたば、

「おれ、千匹妊はらませたから、おれあ生命なくなつたてええ」
て言うけど。そしたば、

「人間など賢くくて、五月節句の菖蒲湯さ入つじど、そんなものみな堕ちてしま
う」

ていう音聞きつけたど。その娘あ、蛇の子妊んだなだから、節句来んなばり待ちていたど。そうして節句来つじど、こんど菖蒲湯立てて入ったど。そうしたらば、蛇の子、井風呂の中さゾロゾロ生まつて来るのだど。

んだから菖蒲湯さざあ入るもんだど。どーびんと。

(大平・渡部もよ)

15 蛇

聒

娘三人持つて、蛇体さ、

「田んぼさ水かけて呉るごんだれば、おれ三人娘持てだから、どれでも一人、水かけてくれたら呉れる」

て、そのじんつあ言うた。一番大きなも嫌^やんだ、二番目も嫌^やんだ、一番末っ子が、

「おれあ、蛇体のおかたにだら、おれあなる」

て、そして親父さ、針千本と千なりフクベンもらつて行つたど。そして蛇体さ、針千本は浮かすように、フクベン^は沈むようにしてもらいたい、そうすつどお前のおかたになつからつて……。そいつを沼さ投げたど。んだげんども、千なりフクベン^は沈まねくて、一生懸命でかましているうちに、針千本がみな刺さつて死んで、娘が帰つて来たど。

(新沼・渡部勝見)

16 桃 太 郎

「さて、今日は川さ行つて洗濯しつかな」

て、おばちやが行つたつて。そうすつじど、向うの方から何か赤いものが流つて来つて、

「はて、奇態なものが流つて来たもんだ。川さ野郎こべら流して寄こしたべかなあ」

て、おばちやが洗濯しつたつて。だんだんおばちやの岸さ寄つてくる。こういうわけよ。「奇態なものなあ」て、おばちやがこんど洗濯やめて、それ眺めていたところが、こつちさ流つてくる。そして拾つてみたらば、大きな桃だったわけだ。

「いや、これは大した桃だ。こんな大きな桃見たことない、早く行つて、じつちやさ見せんべ」

て思つて持つて来たど。そして、

「桃持つて来たから、じつちや早速御馳走なれ」

て言うわけで、庖丁探ねたに行つたところが、二つに割れてオボコが出たど。こ
ういうわけだ。

「いや、オボコ持ちだくっていたけあ、ええがつたなあ」

て、二人が喜んだど。そして桃太郎好きなのは何でも食べさせたらば、ずん
ずん大きくなつた。そして大きくなつたところが、

「おばちや、団子こしやつて呉ろ」

こいうわけだ。

「団子など、何しつこど」

て言うたらば、

「何が島ていどこに鬼がいた。その鬼を退治する」

「まだ早いから、そんなことすんなよ。桃太郎、いまと大きくなってから行け」
て言うげんども、聞かねがつたど。

「いや、こさつて呉ろ」

「そんなら、こさつてやる」

ていうわけで、おばちやが団子こさつて呉たど。そうこうしているうちに、お猿さんが来て、「桃太郎さん、どき行く」

「こういう島さ、鬼征伐に行く」

「ほんじゃ、おれに一つ団子呉ろ、おれも連て歩えべ」

て。そうこうしているうちに犬が来た。犬も「おれどこ連て歩えべ」ていうわけで、犬さも団子呉て、キジから犬から猿から連て鬼が島さ行った。

「おれが大きな鬼さ向うから、お前だは小っちゃい鬼さ向えよ」

なて、いろいろ語つて行つた。そしたればいだっけ。そして桃太郎は大きな鬼さ向つた。そして鬼もいよいよ降参して謝つた。そして宝物もらつたのよ。山のほど宝物、車さ積んで、キジが綱引き、犬、桃太郎はちゃんと宝物さのつて来たっけど。

(高畑・斎藤きち)

17 クエンクエンコむかし

じじとばあつたけど。じじは山さ柴伐りに、ばばは川さ洗濯に行つたど。川上から赤い小箱と白い小箱流つて来たけど。そうすつど、

「赤い小箱こつちや来い、白い小箱そつちや行げ」

て言うたど。そうすつど赤い小箱こつちや流つて来たけし、白い小箱向うさ流つて行つたけど。そうすつど、ばば、オボコもいねがつたもんだから、赤い小箱わらわらと持^{たが}つて来て見たれば、小つちやこいクエンクエンコ入つていだわけだど。そしてユルリさ火焚いてだもんだから、温かくしておいで、大事にして大きくなつたけど。そして大きくなつて、こんどあよつぽど大きくなつたもんだから、鋏^{たが}も持^{たが}け、手斧も持^{たが}け、なんて言うて、じじとばば、鋏もみな背負つたり、手斧を背負つたり、クエンクエンコさ、追かけて行つたど。そうすつど、

ここ掘れ クエンクエンコ

ここ掘れ クエンクエンコ

て言うどこだもな。そうすつど、「何語んべ、まず」なて言うたげんども、背負つて行つた鍬で掘つてみつど、そしたら錢だもな。「いやいや、大したもんだ」なて、あつちも掘りこつちも掘つたりしたれば、なんぼも錢ばり出てくる。じじとばばはその錢きれいに洗つて干しつたど。そしてクエンクエンコ連て来たど。そして大事にして育てていたば、隣のばば、

「昼飯食わつたか」

て来ただけど。

「なえだ、こつちの家に錢、金、どつから出したつた」

てだど。そうすつど、

「おらえのクエンクエンコ、歩え^あなて言うけあ、鍬も背負え、唐鍬も背負えなて、手斧も背負えなて畑さ行つてみたば、そして掘つてみたば、こがえに錢出たなだ」

なて言うたど。

「ほんだら、おらえさもそのクエンクエンコ貸しておくやい」

なて言うたどな。

「いやいや、こいつ貸さんねどこでない」

て言うたら、

「そんじや、じじ連^せてきて借つて行かんね」

なて、じじ連て来て、むごさくて大事に飼つてだなビリビリ引っぱつて行つたど。そして貸してやったところが、背負えとも言わねな鍬を背負つたり縄つけて、ぎりぎり引張つて行つたど。そしたらここ掘れとも言わねな掘つてみれば、いや汚ない馬の糞や牛の糞などばりビタカタと出て、ピリツとはじけて顔^{つら}さ泥糞だらけだ。「こつげなクエンクエンコだ」なて殺してしまつたど。そうすつど、蘭塔さ埋めて来たのだな。そうすつどクエンクエンコ持^たぎに行かんねて行つたらば、「今日^{こんにち}は、おらえのクエンクエンコ返しておくやい」て言うたど。

「はつけなクエンクエンコ、わかんね。牛の糞と馬の糞などばり出てわかんね。さつぱり銭出ない。あつけなものぶち殺して埋めて松の木植えて来たから、行つてみる」

て言わっじゃど。そうすつど、じじは泣き泣き来て、むごさいごとした。殺さつで蘭塔さ埋めらっじゃて、言うて、じじとば墓詣りに行つたんだど。そうすつどこんど、その松の木、だんだんにおがって、見てるうちにおがったど。そうすつど大きくなつたから、伐つて松の木でスルスこしやつたどな。そしてスルス挽きすつど、ばばの前さ銅貨、じじの前さ金貨、ジャランジャランと銭いっぱい落ちたど。じじとば喜んでいたどこさ、隣のばば来て、

「昼飯食わつたが」

て来たど。

「いやいや、こつちの家の銭、どつから出しなさつた」

て言うど、

「そつちの家でおらえのクエンクエンコ貸さんねて言うな、ビリビリ連て行つて殺してしまつたし、松の木植えて来たな、松の木でスルスこしやつたな、スルス挽いたら銭落つて来たなだ」

て言うたど。

「そんなじゃ、そのスルス、おらえさも貸しておくやい」

て言わっじゃど。「貸さんね、貸さんね」て言うたげんども、じじ連て来て、ビリビリ二人で来て背負つてつたつて。そうして挽いてみたところあ、ばば前さビタ糞、じじ前さ馬の糞、さつぱり銭など出ないごんだ。そうすつどじじあごしやいで、こんどそのスルス持たがきに行かんねて、じじ行つたど。そしたらば、

「あつけなスルス、おら前さビタ糞、じじあ前さ馬の糞で、さつぱりわかんねから、みな焚あいてしまった。灰あそこさあつかから持つて行け」

て言わっじゃどな。

「いやいや、おえないことさつだ。クエンクエンコは殺される、スルス拵うど、スルスはみな焚あかつて、灰あばりになる」

て、じじは泣き泣き、また灰持たがつて家さ来たすもな。そうすつど仕様ないんだし、灰持たがつて行つたど。そうすつど、

「そこ通る者、誰れもんだ」

て言わっじゃど。「花咲かせじじだ」て言うたど。「ほんじゃ、花咲かせてみる」

て言わっじやど。「はい」なて。ほんで木の上さあがって、

アヤチュウチュウ

コガネサラサラ

チチンポンポン パーリン

て言うたずも。

「いや、きれいな花だごど。きれいな花だ。もう一ぺん咲かせてみる」

て言わっじやどもな。そうすつどまた「アヤチュウチュウ、コガネサラサラ、

チチンポンポン パーリン」て言うたずもな。

「いや、きれいな、かえつてきれいな花咲いた、じじ、もう一ぺん咲かせてみる」

て言わつて、そうすつどまた、じじあ「アヤチュウチュウ、コガネサラサラ、

チチンポンポン パーリン」て言うたずも。

「いや、きれいな花だ、なえだて上手な花だ、ほんじゃ御褒美やつから、降りて

来い」

て言わつたど。そうすつど、じじあ木の上から降りて来たつけあ、殿様に、

「重いカゴええか、軽いカゴええか」

て言わっじやど。

「おれは年寄りで力は持たないから、軽いカゴ呉つておくやい」

て言うたど。

「ほんじゃ軽いカゴ呉つから、家まで行くうち決して開けないで行けよ」

て言わっじやけどな。「はい」なてもらつて家まで来たど。

「ばば、ばば、殿さまさ行つて花咲かせて、御褒美もらつて来た。家まで開けないで行げて言わつて来たから、家で開けてみろ」

なて言うたど。そしたら開けてみたところ赤い衣裳から銭からいっぱい入つてだんだんも。

「いやいや、これはええ」

て喜んでいたどころさ、また隣のばば来たずもな。「昼飯食わったが」て来たずもな。

「いやいや、またこつちの家で衣裳と銭と金、どっから出しなさった」

なて言うたど。

「いやいや、おらえのじじあ、お前家でスルスみなぼっこして灰にしたな、灰持つて行つて、そして殿さまさ行つてもらつて来た」

て言うたら、

「ほんじゃら、おらえのじじもやらんなね」

て、スルスの灰ないもんだから、ユルリの灰持^たつて行つて、そしてまた山さ行つてまた、

「そこ通るもの、誰もんだ」

「花咲かせじじいだ」

「そんじや、花咲かせてみろ」

なて言わつじやどな。「はい」なて、上がった。そして、

アヤチュウチュウ

コガネサラサラ

チチンポンポン　サラリン

なてしたずもな。

「さっぱり咲かね、面白くない、花さっぱり分かんね」

て言わつで、「もう一ぺん咲かせてみる」て言わつだずも。「アヤチュウチュウ、コガネサラサラ、チチンポンポン　パラリン」て言うたげんど、さっぱり咲かねがったずもな。

「わかんねがら、降つでこい」

て言わつで降つで来たずも。

「御褒美あげる。重たい籠ええか、軽い籠ええか」

「おれは豪傑者だから、重たい籠呉つておくやい」
て言うたどもな。

「そんじや重たい籠呉つから、家まで決して開けんなよ」

て行つたところが、とても背負つたげんど重たくてとても歩かれるもんでない。そして何入ったんだか見たいくて、家まで行かねうちに、開けたもんだど。途中でよ。そうしたところが、中さ入っていだの、何にも錢も衣裳も入っていねで、

蛇だの、蛙だの、蝮だの、イタチだのいっぱい出て、じじどこ刺したど。泣き泣き来たど。そうすつどばば、

「じじあ唄うたつて来た」

なて、家の屋根さ上がつて、トンコベラ叩いて待っていたけど。んだから、人の真似ざあするもんでないど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

18 クエンクエンコむかし

ばばが川さ行ったら、赤い小箱と白い小箱流つて来たど。

「赤い小箱こっちゃこい、白い小箱そっちゃ行げ」

て言うて、開けてみたら、クエンクエンコ入っていたけど。そのクエンクエンコ飼つてで、畑さ行つて、「ここ掘れ、ここ掘れ」て言うから掘ったれば金出たど。そうすつど隣のじじから借りに来らつて、貸して、汚ないものばり出たもんだか

ら、そいつつぶして松の木植えたど。そうすつどそいつ伐つてスルス拵つて、そして挽くじど、じじとばどさ、錢ザクザク、じじどさ金、ばどさ錢、ゾロゾロ、ゾロゾロ出た。そうすつどまた隣のばば見て行つて、じじあまた借りに来た。根性ええもんだから貸さねて言わねで、また貸してやった。ねつから、スルス挽いでも、やつぱりあの通りで、汚ないものばり出るもんだから、

「こんなもの分んねえ」

て、切つて焚いでしまった。そして焚いてしまった灰を攫^{さら}つて来たわけだ。そして花咲じじいしたなだな。そこさ殿さま通りかかったど。

アヤチュウチュウ

コガネサラサラ

チチンポンポン パラリン

て咲かせたれば、「いや、みごと、みごと」なて殿さまに賞めらつて、御褒美もらったど。そしてこんどその褒美もらつて来たの見て、隣のじさま、また真似してしたどこだど。灰集めて行つてしたれば、殿さま来つどこ待つててかけたれば、

こんど殿さま灰だらけになったど。そして縄つきになったど。んだから人の真似しねんだけど。とーびんと。

(大平・渡部もよ)

19 クエンクエンコむかし

じんつあとばんさいたっけど。川さ洗濯に行ったら、小箱流つて来たど。

「赤い小箱こっちゃ来い、黒い小箱そっちゃ行げ」

て、ばばが赤い小箱拾って来たど。そうすつど赤い小箱持^たって家さ来て、

「こがえなの、ばば何だ」

て言うたら、「赤い小箱拾って来たどこだ」て喜んで開けてみたら、ちっちゃな犬こが入っていたっけど。そいつ育てて、そしてその畑さ行つて、ここ掘れ、ここ掘れて言うから掘ったところが、ザクザクと大判小判が出て来たど。そいつひろげだどこさ、隣のじじとばばが来て、

「これ、どっから取って来た」

て言うど、

「これ、こういうわけで、犬こが掘れて言うので掘ったら、出たから干しっただこだ」

そうすつど、その犬貸せ貸せて。貸さね貸さねて言うのを、ビリビリ借りて行つて、掘れとも言わねの掘ったど。ところで牛のビタ糞、ビタカタと出てきたもんだから、「こつけな犬、山さ行つて殺した」

て、持つて来たど。そんでむごさいと言うて、松の木植えて来たど。そうすつど松の木がグングンと大きくなつて、その松の木でスルスを手ったど。そして、

松の木のコンズルス

よう噛んだ　よう噛んだ

て挽いたら、そのぐるりさ大判小判がざらざら、ざらざら落つたど。そうすつどまたじじとばば喜んで干しっただど。そこさまた隣の悪者じじとばばが来たど。そしてスルスも貸さんね貸さんねて言うのを、ビリビリ持つて行つて挽いたとこ

ろが、やつぱりビタビタと牛の糞のようなものが出たから、こんなものって、ぶっこわして焚いだど。そして竈の中さ焚いだので、「なえだ」というたら、「こっげなもの焚いてしまった」て言うたど。そうすつどじじとばば、いたましいもんだから灰を集めてきて、袋さ入つて枯木さ上がつていたどこさ殿さまが通りかかつて、

「何しった」

「おれあ、枯木さ花咲かせてみんべと思つて、上がつていた」
どかて…。「咲かせてみろ」

アヤチュウチュウ

コガネサラサラ

チチンブンブン パラリン

とやったど。そうすつどきれいな花が見てる間に咲いたもんだから、御褒美をもらつて来て、置いっただどこ、そこさまた隣のじじとばば来たわけだ。そうすつど残り灰持つて行つて、待つていたど。

「ああ、またいたな。お前は何だ」

「この枯木さ花咲かせてみんべと思つてだ」

ところで、また、「アヤチュウチュウ、コガネサラサラ、チチンプンパ
リン」で撒いたところが、花さつぱり咲かねで、殿さまの目さ灰が入つたど。

「こんなやましいもの、あつたもんでない」

て、殿さまの下役にせめらつじやど。とーびんのと。

(新沼・渡部勝見)

20 狐 女 房

おかた持たねで、一人で炭焚きに山さ行つてだど。そさ、狐、女になつて来てよ。そうすつどくるくると、ええ女になつて泊つていたら、子どもできたのよ。その子どもに男の子だったので童寿丸と名付けたど。

その子がだんだんと大きくなつて、山さ行つてだうちに、おつかさと二人でい

だんだんだけど。そうすつど、昼休^{やす}びしたんだとなあ。そうすつど、

「化げ大きい、ワワいた、ワワいた」

て、正体現わしてしまったもんだ。そうすつど、「恐かない、恐かない」て泣いた。

「さあさ、困った、正体現わしてオボコにまで憶えらつでは、とてもおれはいらんねぐなった」

て思つて、くるくるつて陰さ行つて三度廻つて、ええ元のダダになつて来たけど。

「童寿丸、なして泣く。ワワいたなて、ワワイねごで」
て騙したのよ。そうすつど、

「おれは正体現わしたから、親父と、とても一緒になつていらんねがら…」

て逃げたのよはあ。狐になつて、やせ狐になつてプンブン、プンブンと信太の森さ行つてしまったのよはあ。そして親父来たれば、オボコ一人で泣いっただけ。

「坊、なして泣いっだ。おかちや、どさ行つた」

なて言うたげんど、アンアン、アンアン、おかちや、おかちやて泣ிட்டごんだど、かまわず…。そうすつど仕様ないもんだから、見たれば屏風さ書き置きしてあつたど。

「おれは狐である。今までお前に御厄介なり申したげんども、とてもおれ正体現わしたものの、子どもに見つけらっじや、とてもいらんねがら、用あらば信太の森の葛の葉さ来い」

てあつたど。そんでオボコ背負つて信太の森さ行つたど。

「信太の森の葛の葉、信太の森の葛の葉」

て行つたげんども、行き会わんねくて、下さ行けば川の音、ごうごう、ごうごう。天井さ来れば笹葉の音ばり、ガサガサ、ガサガサと音する晩で、さっぱり行き会わんねがつたど。

「んだから、帰んなねごではあ」

て言うど、オボコは「かあちや、かあちや」て泣くばりだつたど。

「ほんじや、また降つて行つて見つか」

て降つて行つてみたところあ、ええ女になつて来たつけど。

「今まで、おれも厄介になり申していたげんど、とても狐だったから、こういうわけで…」

て語つて、「んだから、こんで別れだから、もしか變つたことあつじど、おれの一番大事な宝生の玉、何かあつどきに耳に当てて聞け。この大事なものの、このオボコさ呉れつから…」

て、そいつ呉つて、こんど、

「ほんじゃ、これでお別れだから、安名殿、安名殿」

やせた狐になつてピンピン、ピンピンと行つてしまつたど。そしてこんど家さ来て、大きくもなつたべもな。そうしたところあ、家のぐるりさ鳥来て、カアカアて、うんと鳴いだど。宝生の玉耳き当てて聞いたところあ、旦那衆の親父、病気で医者も典者もかなわねくて、なんぼしても病気で死にそうになつてつてだから、そこさ行つてみると言うけど。そして「サンオキ、サンオキ」て行つたど。そして行つたれば、「サンオキ、サンオキて、何か来つたぜ、オボコなど連^せて来つた。

あげな者だげんど……」て、若衆見つけで、「早く招ばって来てみる」なて、招ばって来たど。そうすつど、

「まず、今夜はくたびっだから、明日の朝にさせて呉ろ」

て、サンオキしないで、その晩衣裳など息子ええ着物きせらつで、お湯さなど入れらつで寝せらつじやて。

こんど朝げに早く起きて十二才ばかりになったヤロコ起きてザブザブて水垢離とつて、チャクチャクて、サンオキしたど。したらこれは唯ごとでない。家を建てつどきその土台さ、蛇とガマと喧嘩して、今呑むかとしていた。それを早く掘り返しすつど、この病氣は一枚紙はげるように治るというど。

そうすつど若衆いっぱいでそこ掘り返してみたところあ、やつぱしその大きな蛇とガマ、大きな喧嘩していたけど。そして取つたれば一枚紙はげるように、その病氣治つたど。そして金でつちらもらつて来たど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

21 狐 女 房

ある山でよ、炭焚き親父どこさ、狩人来て、狐追って寄こしたど。そうすつど、炭焚き親父どこさ飛び込んだよ。その狐がそうすつどその親父が可哀そうだちゅうわけで隠して助けてやったんだど。そのうちに狩人、

「入って来ねがったか」

と言うど、

「入って来ねがった」

て、こういうわけで隠して、狩人の去った後で狐帰してやったど。そうすつどその狐が何も恩返すことなくて、その親父が一人身であつたそうだ。

ある夕方、ダダになつて、

「峠越えるんだげんども、道迷って行かんねから、一晚泊めて呉ろ」

て、そういうわけで来て、親父どこさ泊めてもらい申して、オカタいなくて、一人身なもんだから、さまざま夜話した結果、オカタになったんだごで。そうし

て子どもも出そうになつて、一人持ったのが童寿丸だつたど。

あるとき、母親と二人で、親父あ稼ぎに行つたとき、昼休やすびしつたとき、母親も何知らずねぶつてしまったから、元の体になつて、狐尻尾出していたのだど。

オボコ目覚まして見て、

「恐つかない、ワワコ、恐つかない」

て泣くど。そうすつど自分の体現われたから、ある時、子ども騙して寝せて、そして書き置きを結ゆつけて山さ去つたもんだ。子ども泣くときに、

「尋ね来てみろ、信太が森の葛の葉に」

て三度呼ばれ、と書き置きして行つたんだど。

親父、カマから帰つてみつど、オボコは、「恐つかね、恐つかね」て泣いていたど。

「何して、こんな暗いシマにして泣いている」

て、家さ寄つて来て、火焚くべと思つたば、鍵さそういうわけだど。

「こういうわけで助けらつた御恩に、おれあお前の子孫作りに、お前のオカタに

なつたんだから」

て、そして子どもと昼休^{やす}びしったときに、正体現わしたから居らんねから、子ども泣くときは、こさ来てみろて書いてだんだど。

子ども泣くから、子ども背負つて信太が森の葛の葉さ行つたんだど。そしてその峯さ行つて、「信太が森の狐」て呼ばっけんども、それでも音しねわけだど。上にあがれば風の音、下にさがれば水の音、それで何度呼ばつても居ないし、殺すより他ないべと思つて、自分がその子背負つて食つて行かんねと思つて、そして途中で親父は殺すとしたれば、道の脇でカサカサていうたど。そしてちゃんと「殺さねで呉ろ」て、おかたになつて出てきた。別れつどきに、宝生の玉というのを子どもさ呉つじやのが、宝生の玉で世界一のサンオキになつたど。安部のセイメイというのだど。そして別れに、克蘭克蘭と、よくよくのやせ狐だから、決しておつかて言わんねぞ、そして泣くときには、その宝生の玉舐^なめらせつど黙るし、こうすつど眠ぶるし、て教えらつて来たど。そしてその宝生の玉で鳥啼くべあ、鳥啼くべあ、聞くじど何が出ると分かつど。それでサンオキになつたど。

あるとき、殿さまが病氣に喰付かつて、死に生きすつどき、なじよな医者さ掛けても治んねとき、そのサンオキにおいてもらったど。そうすつど家來の家に、蛇とナメクジと蛙、生き埋めしつたな、その憑りで殿さまが病氣に喰付がっただど。そいつサンオキで分かつて、日本一のサンオキになつたど。とーびんと。

（新沼・土屋ひろえ）

22 狐 女 房

安部の保名が葛の葉というオカタ持つていたの死なつて、山の神さおこもりしつたれば、追わつて、そこさ狐來て、そいつを隠して呉て、

「ここさ狐來たはずだ」

て言うたげんども、袂さ隠して助けらつじやど。そしてもどつてから、葛の葉と同じになつて化けて來て、そこさもらわつじやなだけな。もらわつているとき子ども出そうになつて、そして男の子出て、童寿丸と名付けたど。そして三つに

なつて遊ぶくらいになつたれば、春さなつて日当りええぐなつたれば、その軒屋こまの上さ陽なたぼっこして、狐寝ただけど。そうすつどオボコは、

「ワワいだ、恐つかない。ワワいだ、恐つかない」

て泣いて来たけど。そしたれば化けて親になつて来て、「何居たっけ」「ワワ居だっけ、恐つかない」て言うもんだから、書き置きしてはあ、信太の森の狐だ、助けらつじや恩返しに來たなだげんど、正体、子どもに見付けらつじやから、これで子ども残して行んいからつて、書き置きして行つたどこだけだな。そうすつじど、ちつちやこい三つのオボコだから、信太の森さ、恋しくて、「恋しくば尋ね来てみる」と書かつていたので、安部保名は子ども背負かみつて行つて、寒い谷底なめて春の陽ざしのええとき、里の方温かいげんど、沢中の方は雪あるずも。風寒い時だずも。そして行つて、「葛の葉、葛の葉」て呼ばつけんども、風の音ばりでさつぱり音しねごんだど。そうすつじどオボコ背負ふつて寒い風のとこにあつちさ行つたり、こつちさ行つたり呼ばつたれば、やせた狐かみあ上から來たどこだけど。そうしてクルクルと廻つて葛の葉になつて、そして乳をオボコさたくさん飲ませて、

「これで恩返したから…」

て言うて、宝生の玉と鳥の聴耳という宝物呉つじやど。そいつ耳さ当てつじど鳥の鳴く音みなわかるし、宝生の玉は何彼に当てられる玉だつたど。そして鳥何て鳴くか聞こえつから…と。

「そいつ、おがったら、あずけて呉ろ」

て、もらつて別つたど。んだげんど、

「かあちゃん、かあちゃん」

て泣くもんだから、狐になつて、オボコさ、カアカアと向つたど。そしたば、

「ワワ、恐かない。ワワ恐かない」

て。そして父ちゃんさ背負^ぶさつて来たけど。

そいつがおがつて、こんど占いになつて、殿さまがひどい病気になつた時、占つて直して呉つじやど。鳥の聴耳で聞いて、宝生の玉で治して呉だど。そして日本一の占いになつて治して呉たんだど。とーびんと。

(大平・渡部もよ)

23 瓜 姫 子

瓜姫子、トカラントカランと機織りしったげんども、

「山いも掘って来て食せつから、戸決して開けんなよ」

て、瓜姫子一人置いて行つたなごでな。そして行つたところあ、

「瓜姫子、機織りしったか」

なて、天邪鬼来たどこだど。

「ちいと戸開けて見せて呉ねが」

て言うど、

「見せらんね、戸決して開けんなて教えらつじやがら、戸は決して開けらんね」

て言うたど。そんでも、

「ちいと開けて見せろ」

て言うたど。「開けらんね、じつちやとばちやに、戸決して開けんなよて、言
わっだから、戸開けらんね」て言うても、「ええから開けて、ちいと見せろ」て言

わつで、ちいと開けたじもな。そうすつどこんど、

「いまちいと開けて、ちいと見せろ」

て言わつだど。そうすつどガラリ開けて瓜姫子どこ、

「梅もいで呉^けつから、いまちいと梅の木さあがれ」

て、梅の木のどこさ連^せて行つたずもな。

「そげな恐つかないどこさ、上がらんね」

「ええから、いまちいと上がれ、いまちいと上がれ」

て、おつかないて言うのを、ビリビリ上げて、髪を枝さからませて、梅の木さ吊るしたごんだど。そうすつど、われあ瓜姫子になつてええ衣裳着て、機織りして、瓜姫子になつていだど。そしてじじとばば来たなだもな。

「瓜姫子、なえなんだか、機織りしつたな」

天邪鬼は機織りなどしたことないから、ドガランドガランなて、梭などばり落して、さつぱり上手な音しないずもな。

「なえだて下手だな、音悪^われな」

なて帰つて来たど。そしたれば、

「いも掘つて来たから、瓜姫子」「はい」なていたずけな。そしていも茹でて食せだけつてな。

「瓜姫子、いも茹でたから食え」

て言うたけど。「いもの皮むいて食えよ」て言うど、「皮は皮の薬、毛は毛の薬」なて言うどもな。

「なんだごど、瓜姫子。皮と毛、きれいに取つて食えよ」

て言うたど。そうすつどまた、「皮は皮の薬、毛は毛の薬」て言うずも。そうすつどそこさ前の梅の木さ鳥あ飛んできて、

前の梅の木に瓜姫子

ぶらんこのり キツキツ

て言うずものな。「なえだ、異なこと語つぜえ、ばば、いま一ぺん聞いてみる」なて言うたば、

前の梅の木に瓜姫子

ぶらんこのり キツキツ

「なえだ、瓜姫子ぶらんこのり、キツキツて言うぜ」

出はつてみたら、瓜姫子、梅の木さぶらんとぶら下がっていたずもの。

「天邪鬼の畜生だ」

なて、天邪鬼のどこ、ぶち殺してしまつたど。そして瓜姫子むごさくて、大事に育てつたな、殺さつたもんだから、じじとばばむごさくて、うんと立派に埋めて来たど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

24 瓜 姫 子

瓜から生まつて瓜姫子というて、おがつて機織りして、そのばんさが、

「おれ、町さ行つて来つから留守居してろ、天邪鬼来つから決して、おれ居ないとき、戸開けんなよ」

て、そう、そのばんさに教えらったど。そしてばんさ行つた後さ、その天邪鬼が、じきに來て、「戸開けろ、戸開けろ」て言うて、ビリビリと開けて、天邪鬼殺して、前の梅の木さ結つけて、自分が化けて瓜姫子の着るもの着て、機さ上がつて、機織りしていたど。そうすつど梅の木さ鳥喰付いて、

瓜姫子の機はたに

天邪鬼がぶちのつて

キーコパタン キーコパタン

て言うど。「異なこと鳴く鳥いたもんだ」なて、ばば、梅の木見たれば、瓜姫子髪結ゆつけらつて吊るさつていたど。こんど、「この畜生」て、天邪鬼せめたどこだど。そして天邪鬼殺してカヤ畑引きずつて歩あるつたから、カヤの根つこ赤いんだど。とーびんと。

(新沼・土屋もと)

25 子育て幽霊

産さねで死んだ嫁を棺さ入つて埋めつどき、六文銭入つてやる。そしたら毎晩
鮎買いに来たんだど。その六文銭さあ、なんもつかつても無くなんねもんだど。
そして棺の中で産したてな。そしてその女を追いかけて行つてみれば、蘭場らんばさ
行つたのな。

(大平・渡部もよ)

26 手なし娘

お花じゃ、後家ダダもらつたもんだから、うんといじめらつじやど。病氣になつ
たふりして、後家ダダが、寒の内になど、

「鯉食たいから、鯉とつて来て食せろ」
て言うから、シガがんがんと張つたところさ行つて、その寒いとき、沼さ入つ

て獲ったじだずな。

親父はどこさか出て、いねがったそうだな。そうすつじど、そこさ行つてカエンカエンとヘラ持たがつて行つて突いたれば、拍子よく大きな鯉、バンと上がつて来たけど。そうすつど、その鯉持つてワラワラ家さ来て、ちゃんと煮て、

「おつかさ、あがつておくやい」

てやつて食せたど。んだげんど、お花などなじよかして死ねばええと、後家ダダは思っているのだもの、

「寒に沼さやつたげんども死なね、なじよなこととして殺したらええんだか」

どていだつたど。そんでワカさ行つて自分の病氣のこと聞いたたら、「十才になる子どもの片腕食うど治る」て言わっじやど。そうすつどお花の手切つて食うどええて思つたど。お花は、

「おつかさ、おつかさ、そんじやおれの手切つておくやい」

て。そしたば、

「両手でないど分かんね」

て、両手切ったど。そして手無しになつたんだごで。

そして旦那衆な家でもあつたべ、若衆さ、おつかさは、

「お花は簞さのせて、高い山さ行つて、そつからまぐつてやれ」

てだど。お花、むごさいごでなあ。泣き泣き簞さ入れらつて、親父はいねんだし、後家ダダから、その高い山から、まぐらつじやど。ガランゴロンて……。そんなでも死なねど。拍子ええごでに。まぐらつただげんど簞から出はつて、手のないごんだげんど、コロンと立つたどこだずもな。そして帰つて来て、ダダさ言うたれば、

「いっとき、座頭食つてろ」

なてだど。そうすつど座頭食つてろと言わつたがら、座頭になつて行つたらミカン畑さ行つたど。そうすつど若衆あ来て、

「いやいや、ミカン畑に盗人いた。ミカン畑に盗人いた」

て言わつじやごんだど。そうすつじど、旦那さまさ行つて、若衆は、

「どうしたらええがんべ、旦那さま」

て言うたら、

「手の無い者、むごさいから連て来い」

て言わつたど。そして家さ連て来たど。そして連て来たらば、立派な門で、立派な息子いたのだど。そうすつどなんぼそこからお仲人さつでも、もらわねもらわねて、その息子聞かながつたど。そんで親族の人たのんで聞いてもらつたら、
「おれはどつからお仲人さつでも、いらね」

てだど。

「おらえに手のない娘、お花ていう者いた。あいつだらもらつてオカタにしんぜ」
て言うたごんだど。そうすつじど、その息子、そういうもんだから、何とも仕様なくて、

「息子、ええごんだら、ええ」

て、もらつたど。それから手も無いんだから、オボコ出て困つたど。

その息子は、そこらうんと取立てに歩くかなねがつたど。遠かいどこさよ。その間におぼこ出来たんだど。そうすつど、なじよしたらええんだかていたど。

その頃の郵便持ちはチャカチャカ、チャカチャカと遠かいどこ歩くのだったど。そしてその頃、後家ダダ、茶屋しったごんだずもな。

「手がないげんど、息子出たから早く来い。男の子ええの出たから…」

て、家で郵便持ちに酒一杯出したら、そこさ寝たごんだ。そうすつど何だと思つて見たところあ、

「手もないもんだげんども、お花と名付^{なづ}かったな、ええ子ども出たから…」
て言うので、

「こりや、お花まだ生きてきずがったか」

ていうもんで、ダダが書き直して、

「手のないのから、角生え、キバ生え、とんでもない者出たから…」

て書いてやつたど。そうすつじど、息子んどこさそいつ持^たつて行^いったごんだずも。んだげんど、

「そげな者出たごんだら、なおさら大事に、おれ行くまで居て呉ろ」

ていう便り出したごんだど。そうして来たところあ、郵便持ち帰りにまた廻つ

たごんだずも、茶屋さ。そうすつど、

「また何て書いたもんだか」

て思つて見たれば、大事にしろて書いてあるもんだから、憎いもんだから、

「そんな者は一日も早く追出^{ぼだ}してやれ」

ていうごんだずも。家では、

「息子は何を書いてるもんだか、こげなこと書いてよこす、何のごんだべ」

て、不思議に思つて、そうすつど家でも何とも仕様ないもんだから、泣き泣き家の人も出してやつたど。手のない者さオボコ背負わせてだど。そうして山の神さ行つたのよ。

「おれは手も無いくて、シメシも取換えて呉らんね、なじよしたらええんだか。オボコと二人でなじよしたらええんだか」

て居つど、「目ふたいでろ」て言わつて、いつとき手一方つけてもらつたど。そしてまた「目ふたいでろ」て言わつて目ふたいだら、もう一つの手ついたど。そうすつど喜んで喜んで、シメシも取換えられるし、オボコも背負れるして、喜ん

でいたど。そんな奴やつみたいなことしていたど。

そのうちにその息子帰って来たごんだど。家さよ。そしたらそのオボコ出て大きく育ったがて、喜んで来たど。そしたら、

「何だて、おれ、大事にしろて言うたな、なして、何のごんだべ」
て調べてみたら、その後家ダダの家だけずもな。

そうした頃に、息子もうんとおがって、お花、機織りなど一人でしていだったど。そこさ探たねに行つたんだど。ホラの貝吹いて、フウフウて探ねに行つたもんだど。そしたれば、川で五つ六つになつたのが遊んでいたど。

「野郎、野郎、今ごろ水さ入ってねで、駄賃呉つから、こつちや来い」
て言うたけど。そしたらそのオボコ、とことこと来て、絵図一枚呉れたど。そうしたらば、「あっちの人に、こいつもらつた」て、絵図持つてダダさ行つたごんだど。

「そんがえ、ええな絵図もらい申して」一服喫まれ「言わね人ないごで」
て言わつたど。そうすつど、

「一服上がれ、一服上がれ」

「おれはこうしていらんねなだから、一服喫まね」

て、ビリビリ逃げっこだけだ。んだげんどもそのオボコ、なえだにも聞かね
ごんだ。そして行つたれば戸の口から、こうして見つたれば、お花も見る、そ
の旦那も見るしていただす、オボコは、

「何だべ、おらえのおかちや、こっちの男の人ばり見てっこと」
て言うたど。

「いやいや、そんなでもないごんだ。おれ、まいどオカタにしたお花に似たから、
見っだ」

て言うごんだ。そしたば、

「んだげんども手無いけげんど、お前さんには手あるもんだから、なじよだかと
思つて、黙つて見っだどこだ」

て言うたど。そうしたれば、

「おれも、ほだどこだ」

て言い訳し、一緒になったんだど。そしてその後家ダダは調べらつて、はりつけ磔に
さつたど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

27 糠福・米福

米福は後家ダダの子、糠福は先妻の子であつたど。その人も早くオカタなくしたもんだから、後家ダダは自分の子ばりめんごくで、

「栗拾いに行つて来い」

なて言わつて栗拾いに行くと、糠福どさボロハケゴの穴あいだのあずけて、自分なさ新しいハケゴあずけて栗拾いに行つて来いてだど。そうすつど栗拾つて来つど、こんど糠福の、穴あいだだから、なんぼ拾つても落ちて分かんない。米福のいっぱいなつて、背負つて来たど。そうすつど、

「なえだごど、米福さえもこがえに拾つて来たじだに、糠福、それっぱり拾つて、

いまにお祭り来たたて、お祭りさやらんね。衣裳も買つてけらんねがらな」

て言わつたごんだど。そうすつどお祭り来たつて。そうしたば米福はええ衣裳買つてもらつて、糠福も町さ行きたいげんども行かんねなだど。そうすつど糠福は町さも行かんねでボロ衣裳着せらつていて、米福はええ衣裳着て、お菓子でも何でも買つてもらつて銭もらつて行つたげんども、糠福ばかりもらわんねだどーびんと。

(大平・嘉藤)

28 糠福・米福

糠福は先妻の子で、米福は今の子だつたど。そして栗拾いに行くじど、ハケゴさげて行くじど、栗なんぼ拾つても溜まんねど。そして何してもその通りなもんだから、親父はそんなとき何かで出ていかなかったど。そして沼のどこさ行くじど、死んだ母親が出はつて来て、打出の小槌もらつて行つたど。

お祭りさ行くとき、米福が、

「姉さも行かねか」

と言うど、

「風呂も炊かんなねし、御飯まゑも炊かんなね」

て、後で着物を打出の小槌で出して、さて、祭りさ行ったら、殿さまに見込まつで嫁に行ったど。

(大平・渡部もよ)

29 糠福・米福

後妻ダダもらつて、本妻の子と後妻の子に、糠福と米福と名付けたど。

そして栗拾いに行つて、糠福さ底抜け袋あずけて、米福さはええ袋あずけて米福のがいっぱいになつて帰つて行くど、糠福は沼どこで腰下ろしていたら、おつか出て来て、打出の小槌もらつたど。そしてそいつ叩くど、いっぱい出るのだつ

たど。

お祭りがあつどき、米福の方さ銭でつとり、糠福の方さは銭呉ねでお祭り見にやつたど（後半欠）

（新沼・土屋ひろえ）

30 お糸唐糸

お糸と唐糸は継子の間であるげんども、仲のええ姉妹であつたど。継母にお糸が山さぶん投げられつどき、唐糸が、

「姉ちや、ケシの種子呉つでやつから、蒔いて行けよ」

て、ケシの種子持つて箱さ入^{はい}んのよな、その箱の穴あいたどつから、ずうつとケシの種子落して行くのよ。そうすつど次の年、ケシの花咲いて、そいつ分かつて、唐糸が辿り着くのよ。そして家さ帰んねで、奉公に出たど。そんで、親父が探ねに来るど。親父は泣いて泣いて、眼が座頭のようになつてしまつたわけだ。

「お糸唐糸いたならば、この目はパツチリと開くべし」

て、杖ついて探ねに行くとき、そうすっどお糸唐糸いたどこさ行き当てて、双方から「親父だ」て、たぐさっど眼パツチリ開いたど。

それから親と娘が一緒に暮したど。とーびんと。

(新沼・土屋ひろえ)

31 お 糸 唐 糸

先妻の子がお糸で、唐糸は今の子だったど。やっぱりままカカからいびらっで、二人で出はって、どこかの家の召使いに入っていたどこで、親父おやんつあま帰ってきて、二人居ねていうもんだから、座頭になって、鉦叩かねいてもらいもらい、

お糸唐糸いたならば

この眼は。パツチリあくべぞよ

て、ずうっつと行つたんだど。そうして行くじど二人はええ者になつていだっけ

ど。

(大平・渡部もよ)

32 まま子 いじめ

がらがらとお湯わかしたのさ、その上を渡らせて、渡らんねて言うな、渡れて言うて殺したもんだ。そして藁^ぶ打ち土さ埋めたど。

そうすつど親父帰って来たど。そしてトケコロコーと鶏唄ったど。

鶏唄ったの何のこんだべと思つたら、そこさ埋めただけど。そんで継母、追出さったという。

(大平・嘉藤)

33 笠 地 蔵

まいど、地蔵さまさ、雨降りるとき、そのじじあ来つどき、

「地蔵さま、雨降つてなんぼか、だつてえがんべ」

て、蓑と笠着せて来たけつて。そして年取りの晩げ、火どんどんと焚いて、年取りでいたれば、夜、ヤイヤイ、ヤイヤイて音すつけど。そして、何だといたらば、

「笠の代もつて来た、蓑の代もつて来た」

て言うけど。そして、

「ここだ、ここだ」

て、夜ドサドサ、ドサドサと、でつしら、金から着物から置いて行つたど。そして開けてみたら、銭と金たくさん入口さ置いっただけつて。

んだから灯切^{あかし}らさねじど、テントツキあ来るなんて言うてだもんだ。

(大平・渡部もよ)

34 牛方と山姥 ― 与三むかし ―

むかしあつたど。

与三、牛二匹^{べこ}連て越後さ魚買^せいに行つたど。そうすつど魚、二匹^{べこ}の牛さいっぱいつけて来たれば、途中で暗くなつたのだもな。

「早く歩^あえべ、早く行かねど化物来んぞ、早く歩^あえべ」

て、追つて来たば、そのうちに出はつて来たど。「与三、魚一本呉ろ」なて言う。

「魚、やつと買つて来たな、呉らんね」

なて来たたら、そしたば「ほんじゃ、にしゃどこ取つて呑むぞ」なて言う。与三、仕様^{ししょ}ないもんだから、牛の魚一本取つて呉たど。そうすつど、なじよな間に食つたんだか、ワリワリ、ワリワリと食つて、また追つてきて、

「与三、まだ足んないから、まだ魚一本呉ろ」

て言うもんで、「呉らんね、呉らんね」なて、何度も食^かつて、一匹の牛のみな無くなつたど。そうすつど、

「後の牛のも呉ろ」

なて言わつで、後の牛のも呉^けでしまつたど。「魚もつと呉ろ」て言うから、「魚みな呉^けで、無い」て言うたら、「んだら、牛呉ろ」て言わつじやど。そうすつど牛もモウモウと言うの、むごさいげんど呉ろつて言うの、そうしねど、「にしゃどこ取つて呑むぞ」て言う。恐つかないもんだから牛も呉つじやて。そうすつど「いま一匹呉ろ」て、二匹みな呉つじやど。そうすつど、「われ、食われるばりだ」と思つて、ワラワラ走つて来たど。そうしたところあ大きな深い川あつたどもよ。そうすつどワラワラと泳いで行つて、中の木の上さあがつて見つだど。そうすつどまた来たずも。鬼婆、「与三、与三」て言うけあ、「なえだ」て言うど、「こゝ、なじよして行つた」て言うたら、

「袂さ、いっぱい石入つて来た」

て言うた。そうすつどその鬼婆も正直なもんだから、袂さ石いっぱい入つで、「このぐらいが」て言うけあ、「もつといっぱい入つてだあ」て言うたど。そうすつど袂さいっぱい石入つで漕いだつけな。そうすつどズプツと沈んで、またズプツ

と沈む。与三はワラワラと逃げて来たつけど。

そうして来たところあ、ポカリポカリと小屋みたいな家あ一軒あつて、灯し見
えつから、そこさワラワラ頼つて、「お晩になつたつし」て言うたら、「はい」な
て、若い娘一人いたけずもな。そうすつど、

「いやいや、今日越後さ魚買いに行ったけあ、牛二匹さ魚買って来たげんど、魚
はみな食われる、牛がらみ食つじや。こんどおれも食れつから、どうか助けてけ
ろ」

て言うたど。

「ほんじや、そいつおらえのばんさだべ」
て、その娘言うこんだど。そうすつど、

「ほんじや、二階の上さでもあがつてで呉^けろ」

て言わつじやど。そうすつどやつぱし二階の高いどこさ上がつたもんだど。

「姉、姉」て、来た音すつけど。「はい」て言つてだけど。

「与三に、カブダレ餅食せらつて死ぬどこであつた」

て来たけど。「早く寄れ、寄れ」なて寄せて、火焚いて、こんど当てたど。そして背中あぶりしたけど。

「あんまり腹へったから、酒でも飲むべ」

て言うので温めてけたど。そうすつど与三も、われも腹へったもんだから、青苳おぎの棒でツウツとその酒。ぺろつと飲んでしまったど。二階の上にてよ。鬼婆眠て起きてみたら、

「酒温まったべから、酒飲むべ」

なて起きてみたくも。そしたら酒さつぱりない。

「酒さつぱりない、火の神飲んだんだか、何の神飲んだんだか、さつぱり酒ない。ほんじゃ餅でもあぶって食うべ」

て、餅をワタシさいっぱいあぶったど。そうすつどその餅も与三は天井で棒さチョコツと突いて、あぶっては食い、鬼婆、そこさ眠つたもんだから、餅。ぺろつと食ったど。そうすつどこんど餅焙ぶつじやら起きて食うべと思つていたら、また餅さつぱりないもんだ。

「いや、餅もさっぱりない。火の神食ったんだか、ワタシの神あ食ったんだか」
て言うもんだずも。こんどは「寝んべ」て言うけずも。

「姉、寝んべ。木の唐戸さええか、石の唐戸さええか」
て言わつじやど。

「木の唐戸さ寝んべ。あんまり寒いから」
て、木の唐戸さ寝たごんだ。そうすつど与三は姉と二人で組んで、大鍋さでつちりお湯わかして、煮立てて、キリで穴あけだけど。

「今夜、あまりええもんだから、キリキリ虫あ音する」
なて、中で寝つだもんだど。そうすつど、穴からガラガラと煮えた湯をそこさどんどんと入つだずも。

「姉、あついあつい、姉、あつい」
て言うど、

「何、姉であんべ、おれあ与三だ、牛の魚みな食つて…、姉でない、与三だ」
て言うたど。

「与三助けろ、与三助けろ」

て言うたど。そしてだんだんに音ちっちゃくなって、「与三助けろ、与三助けろ」
て、こんど音しねぐなつたど。そして死んでしまったべ。次の日開けてみたらば、
化けものは大きな火碗だったけど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

35 牛方と山姥 — 与三むかし —

牛方して、まいど、ここ越えて明神平から杉沢さ越えて、そしてずっと行つて、
越後街道で石滝さ抜けて越後さ行つてもんだど、牛でな…。

そうすつど、与三ざあ、毎日牛ひいて行つてだど。そして毎日買いに行つてい
たれば、そんな時暗くなつたごんだど。そうすつじど、そこに小屋あつけずもんだ
から、そこさ泊めて呉ろて泊めてもらつたど。そして泊つたれば、

「与三、魚一本呉ろ」

て言うけど。そうすつど「ほら」てやったど。そうすつどムリムリ、ムリムリて食つてしまつて、「いま一本呉ろ」て言うど。そうすつどまたやり、またやりしてはあ、ありだけ呉つじやど。そして牛も呉ろて言わつじやど。

「牛呉らんね。牛呉つじやれば明日から魚つけ、さんねから、呉らんね」
て言うたど。そしたれば、

「呉ねごんだら、与三とつて呑むぞ」

て言^やつじやけど。こんどはとでも仕様ないし、牛夜ひくわけに行かねんだし、それみなムリムリ、ムリムリと食^かつてしまつたど。こんどは、

「与三、とつて呑むぞ」

て言^やつじやもんだから、逃げて行つたれば、沼あつけど。そこ泳いで行つたれば、木、真中さあつけど。そうすつどワラワラと行つて、その木さ登つたら、来らんねもんだから、与三どこ食^くたいもんだから、

「与三、なじよして行つた」
て言うけど。

「袂さいっぱい石つめて、泳いで来た」

て教えたど。そうすつど本氣して袂さ石いっぱい入って泳いで、沈んでみな濡つだもんだから、寒くてブルブルで家さ上がって、与三どさ行かねで帰って来たど。そうすつじど、「何しつたもんだ」と思つて、与三も来てみた。「いや寒いがつた」て。梁の上さ与三あがつて寝つたど。そしたば、

「寒いがつた、寒いがつた、こげな時あ、餅でもあぶつて食うべ」

なて、餅、ぞろつとワタシさあぶつたけど。そうすつど与三は梁の上で、苡棒よじでチョコクツと刺して食つたど。山姥は腹あぶりして眠ぶかけしたど。そいつン時、餅取つた。「ああ……」て目覺ましたら、餅あさつぱりない。

「火の神さまでも食つたか、ほんじゃ酒でも温めて吞むべ」

て、酒を爛ナベさ掛けて、そして腹あぶりしつたど。また眠ぶかけしたつて。そうすつどまた苡棒で、ツツツツと、酒みな呑んだつて。また目覺まして、

「ああ、酒ない。こりや火の神さま、みな飲んでしまつたべ、ほんじゃ今夜は寒いから石の唐戸より木の唐戸さ入って眠んべ」

て、木の唐戸さ入って寝たど。そうすつど、与三は起きてきて、こんどはそいつさキリキリ、キリキリと穴あけたど。そしたれば目覺まして、

「なえだ、やかましいな、前の杉の木さキリキリ虫あ来たべ」

なて、婆あ寝てて言うけど。そしてキリキリ、キリキリと、なんぼも穴あけて、お湯煮立てて、その穴からチョウチョウ、チョウと煮立つ湯さしたど。そうすつど婆あ苦しがつて、

「さっきだの与三だら助けろ、さっきだの与三だら助けろ」
て言うけど。そうすつど、

「魚みな食つて、堪忍さんね」

て、煮立つ湯、じょうじょうとさして、そして夜明けて見たれば、大ムジナだ
けど。とーびんと。

(渡部もよ)

36 ムジナむかし

三平という人あ、木地山さ行つてだど。そしてそこさ行つたれば、一人泊つてカケゴ掛けつだど。さぶしがりだつたべな。そこんどこさ女人、きれいに髪結つて、「三平どの」て、カケゴ越しに、ヒイて笑うごんだど。そうすつど、さぶしくて、燃えしやり投げてやつたど。そうすつどまた逃げて行つて、またちいともようど、「三平どの」て来て、カケゴあけて見つこんだど。そうすつじど、また燃えしやり投げてやつて、そんでもまた来たけど。そうすつど木伐りに行つていたのだべ、こんどは燃えしやりもなくなるもんだから、そこにあるまさかり斧、ぐいっとぶん投げてやつたど。そしたればそれから来ねつけど。

「来ない、ほんじゃ逃げて行つたべ」

ていたど。そして一晚ねぶんねでしまったべ。そして朝げに目覚まして、こんど表みたば、血たらしした跡あつけど。

「これ、血たらしした、斧ぶつつかつたんだか、血たらしした跡ある」

て、ずいっと後追っかけて見たど。そしたれば大ムジナ、小屋から僅か裏さ行つて死んでだけど。とーびんと。

(大平・渡部もよ)

37 食わず女房

欲ふかな親父、一人身な親父いて、「飯食^まねオカタ欲しい」て。そうすつど飯の食ねオカタもらったけど。そうだげんども、山さ行つて来つど、米あ減つてなくなる。なしてこがえに飯も食ねオカタなて、米減んべと思つて、親父あ梁の上さ隠つて、山さ行つたふりして見たど。そして親父は出はって行くじど、大釜鍋さ飯炊いていたもんだど。そして飯炊いで、ヤキミシいっぱいにぎつて、髪ほどいて頭の真中さ大穴あிட்டもんだ。そこさストンストンとヤキミシ入つでやることがたど。

それで親父見つだもんだから、ババ分かつてで、

「その親父、降^おつで来い」

て、そして降つて来たら、

「この桶さ入れ」

て言わつて、大桶さ入ったていうたな。そのババ、桶背負つて山さでも、ガラガラと走る。そうすつど桶の中でよく神さまさ手合せたど。そうすつど天井から白い揮みたいなもの下がつてきたど。それさ伝わつてあがつて逃げた、そいつ知しやねで、ババ先さ行つてしまった。そして食うべと思つて見たらば、桶が空^{から}こだど。戻つて来て、親父は逃げてきて、大菖蒲と大ヨモギの中さ隠つた。化けものは菖蒲とヨモギの嫌いな化物で、

「出はつてこい、出はつてこい」

て、そのぐるりで待ちかまえていつけんど、親父出はつて来ないから、ババ行つてしまつたど。んだから欲ふかいことしねんだど。とーびんと。

（新沼・土屋ひろえ）

38 食わず女房

御飯食ね嫁欲しいていたれば、御飯食ね嫁来て、御飯食ねくてええ、ええて見つだれば、ヤキミシいっぱい握って、髪ざらんといて、頭の中さポンポンとみな入ってやったけど。そうすつじどこんど、そいつ見つけつじど、オヤジ追かけらつじやど。追っかけらつじやどき、逃げたにも逃げたにも、うんと行くじど、ヨモギと菖蒲あつどこの中さ入ったど。そしたば、

「これさ入つじど、身なりあ腐れつじし…」

て、ぐるぐる廻っけんども、入って来らんねで、生きたけど。

んだから、五月の節供に菖蒲とヨモギをさすのだど。

(大平・渡部もよ)

39 地蔵浄土

じじは山さ柴刈りに、ばばは川さ洗濯に行つて、じじがヤキシ食うど思つたら、ヤキシシがかつ転んで、ねずみ穴みたいなさ、コロツと入ったから、じじもポイツと入つてみたど。そしたばきれいな川原さ、地蔵さま立っていたつけど。じじは、

「地蔵さま、地蔵さま、ヤキシシかつ転んで来ねがつたべか」
て言うたら、

「かつ転んで来たつけ。半分食つて半分残してだ。食うが」
て言うたど。「食ね」て、じじあ言うたど。

「ほんじゃ、晚げおらえさ、鬼こどら遊びに来つから、鶏の真似して呉ねが」
て言わつたずも。そうすつど、

「ほんじゃ、あまりええ」

「ほんじゃ、二階に上がっている。暗くなつて来つから」

て言わっじやど。

「おれヒザかぶさあがれ」

て言わっで、

「いやいや、地藏さまのヒザさなど、もったいなくて、あがらんね」

て言うたど。

「ええから上がれ、ええから上がれ」

て言わっであがったど。

「ほんじゃ、肩さ上がれ」

て言わっじやごんだど。

「肩さなど、とてもあがられるもんでない。地藏さまの肩さなどあがったら、足曲がってしまうべ」

て言うたげんども、あがれあがれて言わっでまた上がったど。こんど「頭さ上がれ」て言わっじやど。「いやいや、頭さなて、かえってがもったいなくて上がらんね」

て言うげんども、

「ええから上がれ、ええから上がれ」

て言わつて二階さ上がって行つたてよ。そうすつど晩方になつて、鬼こどら来た音すつけつてな。ヤイヤイヤ来て来た音すつから、二階でいて黙つていだつけど。そうすつど博奕^{ばくち}打ち始めたど。おれ一だ、おれ二だつて、一生けんめい始めたけな。そして朝方になつど、

パタパタ、コケコロコ

パタパタ、コケコロコ

て音立てたど。

「ああ、一番鶏鳴つたな、始めろ」

なて、また始めたど。そして一生けんめいで、二だの一だので、うんと取つてだもなあ、そして博奕していたれば、また二番鶏、「パタパタ、コケコロコ」、パタパタ、コケコロコ」ていうもんだから、
「ほら、二番鶏だ、三番鶏だと言かんね」

どかて、一生けんめいで、錢でつちら持つてしつたつたてよ。そうすつど、おれ勝った、誰勝つたつていたつけあ、また三番鶏、「パタパタ、コケコロコ」、パタパタ、コケコロコ」ていうたもんだから、

「朝げになった、夜明けたから、大慌てて行かんね」

て、錢などみな投げて行つたつけど。そしていたら、地藏さまに「降つて来い」て言わつて、また、「なじよして降りる」て言うたらば、頭さ上がつて肩さ上がつて、またもつたいなくて上がらんねて言うたげんども、「ええから上がつて」て言わつて降つだつて。そうすつどその錢みんなもらつて、「みな持つて行け」て言わつじやど。

そうすつどその錢でつちらもらつて来たれば、朝げに、

「ばば、ばば、ゆんべなヤキシかつころんで、こういうに行つたれば地藏さま立つて、トリの真似して錢でつつら持つて来た」

て言うたつて。そして、ばば喜んでいたれば、隣のばば、朝げに来て、

「こんにちはっし、火呉つておくらいし」

て来たけど。銭出したったべも。

「いやいや、こっちの家で、この銭、どっから出しやった」
て言うたど。

「おらえのじんじ、山さ柴刈りに行って、ヤキミシかつ転ろばして穴さ入ったから、じんじも入って見たれば、地藏さま立ってだけど。そしてこういうわけだ。鶏の真似してもらって来た」

て、教えたど。そうすつど、ばば、ワラワラと家さ行って、

「おらえのじんじもやんなね」

て、走って行って、

「じじ、じじ、隣のじんつあ、まず昨日柴刈りに行ってヤキミシかつ転んで行つたから、その穴さ入って行ったら、地藏さま立っていたから、行って、そして地藏さまから銭でつづらもらって来た。そなたも行つて来られ」

て言うど、じじさヤキミシ、カテ飯めしであずけてやったて言うけあ。そうして柴切りに行ったら、ヤキミシ、ツンと転ろがし、かつ転びもしねな。ツンと……。銭

ばり欲しいもんだから、かつ転ばし、かつ転ばし、穴の中さ入ったど。そうしたらやっぱし地藏さまが立っていたけずもな。きれいなどこさ。

「地藏さま、地藏さま、ヤキミシかつ転んで来ねがったが」

「転んで来たけ。あんなカテ飯、うまくなって食ねで置いっだ。そさ置いっだ」
「食うか」「食ね」て言うた。

「ほんじゃ、晩に、おらえさ鬼こどら来っから鶏の真似して呉ろ」

て言わっだど。「はい」なて言うて、喜んでいたずも。

「んじゃ、天井さあがつて行げ」

なて言わっで、ヒザかぶさ上がれとも言わねな、じじあヒザかぶさ上がって、肩さ上がれと言わんねな、肩さ上がって、頭さ上がって、天井さ上がって行っだど。そうすつどまたドヤドヤと来たけ言うけな。「地藏さま、地藏さま」なて来たけ言うけな。そうすつどまた一生けんめいで始めて、一だ二だているうちに、また鶏の真似しろて言わっだから、「パタパタ、コケコロコ」て言うたずも。

「ああ、一番鶏唄った」

こんどまた一生けんめいしつたれば、二番鶏「パタパタ、コケコエロコ」ていうた。

「ああ、二番鶏鳴った。夜明けて来つから、三番鶏で行かなね」

て、しつたけど。そうすつど、また「パタパタ、コケコエロコ」て。こんど屁たつじゃごんだど。じじがよ。そうすつど、

「なえだ、人くさい、地藏さま人飼つてたのであんまい、鶏でないな」

て、ワラワラと二階さ上がらつて、

「おれ足食う」「おれ手食う」ので、ぺろつと鬼ごどらに、そのじじ食っただけど。んだから人の真似ざあするもんでないけど。とんびんと。

(大平・嘉藤)

40 こぶとり

むかしあつたけど。

まいど、じじとばばいだっけど。じじあこぶ出て、こぶが出て痛い痛いいたれば、こがえにこぶ張つて病めて仕様ないもんだから、こんどあ、

「ほだれば、団子拵えて呉^けつから、じんつあ、山の神さおこもりに行って来やれ」
ていたど。そうしてばば、トンカトンカと粉はたいて、団子拵えで、うまい団子拵えて行つたけどな。黄粉団子にアンコ団子に、じじさ背負わせて、おこもりにやつたど。そうしていたところあ、

「このこぶを治しておくやい」

て拝み申したど。そうしたば、あっちの石坂の方から太鼓打つ音から笛の音からヒヨロヒヨロヒヨロなて、

「いやいや、何だてお祭りみたいな音する」

なていたら、山の神の前さ、ずっと来て、太鼓・笛が来て、火どんどんと焚い

たもんだどもな。そうすつど一生けんめいに歌ったりまったりして、踊ったりするもんだから、じじも好きなもんだから、面白くて山の神の戸から覗き込んで見ただけ。そしたば、

「あら、なえだ、じじ来たでないか、じじ、じじもはまれ」
なて言わつだど。

「いや、おれは踊りざあ大好きでよ」

「ほんじやらば踊れ、まず」

なて言わつで、そうすつどじじも前に出はつて来て、こぶ出して踊りおどつたつけて。そうすつど、

「いや、じじ、踊り上手だ、上手なもんだ。こりや面白い」

なて、猫は三味ひきで、ムジナは太鼓、イタチは笛吹き、狐もいて、「また明日来い」なて言うたば、「また明日来る、こがえな面白いどこさ」なて言うて、「じじあ明日来ねじど悪いから、そのこぶ取る」どかて、狐はガブリこぶ取つたど。そうすつど猫あケタケタ、ケタケタと舐めて、そのこぶの跡きれいにして呉れた

「ごんだど。そうすつど、じじあ喜んで、

「おれあ団子もつてきたげんど、団子食うか」

て言うたば、

「そりや、うまがんべな」

て、そして団子食せて、「うまい団子、じじあ持つて来た、こりやうまい団子だ」
て、団子ぺろつと食せて、明るくなったから、朝帰りして来たど。そして来たば、

「いやいや、おらえのじんじ、ええ男になって来た。こぶ、なじよし」

「ゆんべな、イタチとかムジナとかいっぱい来て、面白いがった。踊り好きなも
んだから、踊りおどつて、いや面白いがった。そうしたところあ狐あこぶとつて
呉っじえ、猫に舐めてもらつた。きれいになつた」

「そんじや、ええがった」

なて、ばんばと二人で喜んでいたどきさ、また隣のばば、朝げに火もらいに来
たど。

「こんにちはっし、火呉けでおくらえし」

なて来たど。「はい」なて言つたらば、

「あらら、こつちの家のじんつあ、なえだごど。こぶさつぱりない。何したなだ」
て言うたど。

「いや、ゆんべな団子拵つて、おこもりに山の神さまさ行つて、やつたれば狐に
イタチに、こうしてみんな夜来て、山の神のどこで、こぶ取つてもらつて来たど」
「ほんじやらば、おらえのじじもやんなね」

て言うけずあ、ばば真似して、家さ行つて、あつちこつち黄粉つけて、たんと
うまくもない団子拵つて背負わせてやつたど。そうすつどこんど、また狐たちあ、
夜になると来るつけあ、そればり待つていたれば、またあつちから来たていうけ
なあ。ムジナ太鼓叩いて、三味ひきは猫で、イタチは笛吹きで来たど。そしてま
た火ドンドン焚いて、

「また踊んべ、今夜はじじは来てねな」
ていたけずあ、

「じじあ、今夜も来るつけなあ」

て見たれば、来ったけもの…。

「あら、じじ来た。今夜はなえだか別なじじ来ったな。ゆんべなこぶなくしてやつたに、こぶあるじじまた来ったな」

と言うけど。

「ほんじゃ、このじじも踊ってみろ」

と言うたど。

「あまりええ、おれも踊ってみんべ、んだげんどもおれざあ踊り下手だ」
て言うたど。

「なえだ、じじ踊り下手では分かんない」

て、おんつあつで、そして、

「ゆんべなのじじのこぶ、もう一つ喰付けてやる」

なて、こつちの方さもこぶ喰付けらつたど。そうすつど、

「おらえのじじもこぶ取ってもらつて、隣のじじみたいにきれいになって来んべ」
て、ばば屋根の上でトンコベラ立てて、尻あてて待っていたど。そうしたとこ

ろあ、じじは「オンオン、オンオン」て泣き泣き来たど。んだから人真似ざあするもんでないど。ばばあ屋根の上から落つて死んだけど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

41 姥捨て山

姥捨て山で、年寄りになつどみなそこ置いて来らつだもんだど。そんときあの息子が孝行な息子だじごでな。その年寄一人囲つて隠していたつたてな。そんとき、昔だから、殿さまからだごでな、

「打たない太鼓の鳴る太鼓こさつてこい」^ぶ

て言わつだもんだて。村中集まつて幾日^{いっか}晩集まつて相談しても、「打たない太鼓の鳴る太鼓」じゃ拵うべくあないがつたつて。

そうすつじど、その息子、穴倉^いさ入つて隠くしつた年寄さ行つて聞いたつて。そうすつどそのばんさ、

「打たない太鼓の鳴る太鼓なてないごで、夜どこさか亀蜂の巣くつていたな、行つてそつと袋さ取つて来て、そして太鼓のような拵つて、紙で、そいつをスポツと入つて持つて行く他てないごで」

て、教えらつじえ、亀蜂の巣とつて来て、拵つて持つて行つたど。

そうすつどやつぱり、「打たない太鼓の鳴る太鼓」じだごでな。

「まこと、これは珍しいものだ」

それからまた、「灰で縄なつて、千尋もつて来い」て言わつじやど。

「灰で縄なつて、千尋なて、何考えだてこさわれっこない」

これも年寄に、その息子聞いたど。そうすつど、縄千尋なつて、それをソクツと焼いて持つて行かんねて、そう言わつて、縄なつてそつと焼いて、いじらねで持つて行つたじだな。そして殿さまに御褒美もらつたじだな。そしてこいつは誰考えてもさんね、そんで、

「どっから思い出す風にした」

て聞かつじやて。そうすつど親孝行の息子が、

「実は、わるいごんだげんども、姥捨て山さ母背負って行つたげんども、とても親を置かんね、穴倉さこうして隠した。その年寄に聞いたのだ。村中集まっても相談でなくって、年寄に教えらつじや」
て言うたど。それが始まりで、その息子は親孝行の御褒美をもらう。年寄衆を大事にしておく世の中になつたど。

(新沼・土屋ひろえ)

42 黄粉 と 爺

じじちやとばちちやいだつけど。

庭掃き掃き、豆一粒ひろつたど。そうすつど半分が種子、半分が黄粉としたど。
そうすつど半分黄粉にしたものの、篩ないごんだど。篩借りに行かんねど。隣の家さ行くじど子どもがいるし、その隣にも子どもがいるしすつから、借りに行かねで、じんちや禪きわの際でふるつけて、ふるつたど。んだげんども香ばしい匂い

したもんだから近所の子ども衆みな来たごんだけど。そうすっじどじっちや尻の下さかくしたど。そしたら尻たっじやど。その黄粉あ、みな向いの山さ吹っ飛んで行つたど。そうすっど子ども吹っ飛んで行つて、

じじの尻の実あ うんまいな

じじの尻の実あ うんまいな

て、なめたど。どーびんと。

(大平・渡部もと)

43 黄粉と爺

じじとばいだっけど。

庭掃きしたら豆一粒拾つたど。その豆、茶ほうじで煎つて、カラシコロシと煎つて黄粉はたいたど。そしたら篩ないがったど。そうすっど篩借りに行かねつたてええから、おれ樺でふるつたど。そうすっど尻たっじやど。そしたら黄粉ふ

うっと吹っ飛んで行つたど。とーびんと。

(大平・嘉藤)

44 法印と狐

三月のお祭りに、法印さま町から来たら、狐が昼眠しつたど。そんでホラ貝でおどしたど。

次の日、暗くなつどきでもないのに、途中さ行ったら暗くなつたのよ。そしてその尻から茶毘だみやら、恐つかないようなものやら、後から来るもんだから、逃げて、こいつ引越して行くまでと思つて木さ登つたわけだごでな。そうすつじど、なんぼ登つても、木さも上つて来るようはずもの、それあウラまで自分が上つた勘定して、ひっぼろぎ落ちたじだ。そうしたらば、ポオーと明るくなって、昼間になつて、こんど狐が、

「昨日のやがえし、コンコン、コンコン」

て逃げて行つたつて。とーびんと。

(大平・渡部もよ)

45 南の山の馬鹿聲

○ 馬の尻に札

南の山に馬鹿な息子いだけんども、旦那衆な家だけど。そして息子どこさ娘、ええどこさなもんだから、呉つでやつたべ。そうして嫁^いつて、

「馬鹿だなて言うげんども、そがえでもない」

どて、その娘の親はいだど。そしたればこんどその家さ、三ツ目に来てよ、
「お仏さま買ったの見せて呉ろ」

て言わつだど。

「ええ立派なの買った」

て言うけど。

「そがえに馬鹿でもない」

て、家でいたど。そしたば板さ節穴あいつだつたど。

「そさ、節穴一つあいつだげんども…」

て言うたど。

「節穴あいつだげんどもな、そこさお十三仏でも掛けておけば、見えねえから、ええでそ」

て言うけど。息子がよ。

「あら、こげなこと本当のことなあ、馬鹿であんまえちやえ」

どて喜んでいたど。そして、

「馬も飼ったから見て呉ろ」

て言うたど。そしたば、

「ええ馬だ」

なて見っただけど。そしてこんどはずうつと撫でて、尻の穴見つけだずも。

「ああ、ここさもお十三仏掛けておくどええ」

て言うたずも。そうすつど馬鹿現われだずも。

「いやいや、馬鹿だじゅうこと本当だな。馬の尻さお十三仏かけておけなて…」
ていたど。

（大平・渡部もよ）

46 南の山の馬鹿賀

○ 団子賀

嫁の家さ行って、団子ごちそうになって、うまいがったがら、家さ行って教え
んべと思つて、帰つどき、溝あつて、ピンと跳ねたら、

「ピントコ、ピントコ」
て行つたど。

（大平・渡部もよ）

47 テンポむかし

夕顔、朝げに、子ども衆大勢で、家の前さ植えたど。そうすつじど、毎日小便かけたりしておがしたど。おがったにも、おがったにも、天竺さ届いたど。そうすつどそこをみんなで上がって行つたど。天竺さ行つたど。そして天竺さ行つたらば、天竺の子ども衆いでで、鐘よ太鼓よて、ドンドン、ドンドンと叩いて、雨降らせたど。そうして遊んでまた夕顔降つて来たけど。

その雨は子ども衆の小便だったど。

(大平・渡部もよ)

48 果てなし話

あるところに、天竺から長いフンドシ下がつて来たけど。
「みんな、ぐるりさ集まれ」

そしてそのフンドシ、長い禪、一尋、二尋、三尋……十尋。

（新沼・土屋ひろえ）

49 長い話

向いの山さ行って、大木あるな伐ったど。そしたらば大蛇出はって来たど。そうすつどワラワラ逃げて来たけど。その蛇あ、今日もノロノロ、明日もノロノロ、毎日出はっても長くて長くて、毎日長くて、出上^あげたざあない蛇だったど。今日もノロノロ、明日もノロノロ、……。とーびんと。

（大平・渡部もよ）

50 どんびん さんすけ

どんびんさんすけ、さるまなぐ、さるのまなぐさ毛が生えた、けんけん毛抜きで抜いたれば、まんまんまつかになりました。

(大平・嘉藤)

山合いの村

—あとがきに代えて—

過疎の波（大平・新沼・高畑にて）

「貝吹き山」という山が飯豊町新沼という部落の入口にある。そのむかし新潟や小国から買物に来た人々が荷を背負ってやってくると、貝を吹いて部落の人々に知らせ、その荷を奪ったものだという伝説がその山にある。今は五戸だけの部落で、炭焼きをしている家の他は、ほとんど冬は出稼ぎをするという。大雪のときには、電報で東京の出稼ぎ先に、「雪掘りに帰って来てくれ」と連絡するといふほどで、冬の吹雪のものすごさを示してくれる伝説も地名などになって残っている。「オオナダレ」というのは萩生の人が晦日の松迎えにやって来て、大雪崩に遭って四十人ものが死んだ場所だという。だからその部落では今でもその山に松迎えには入らないと言っている。

この新沼では隣部落の大平と「葬式組」を作っている。五戸では葬式も出せないということからであるが、大平部落十戸が、冬前に山を降りるといふ話もある

ということ、もしそうなら、新沼はどうなるのだろうか。昔から大平と新沼はメンツなどの曲物の産地であった。曲物の柄杓も大量に作られていた部落である。曲物の話を聞くと、熊狩りと同様、人々は大きい声で語ってくれる。山での苦労話は、妖怪談義とちがって、生活を支えたものであるから、細かい技術を伴って語られるもので、技術と結びつかない苦労話は、聞く人々を納得させないものだ、つくづく思ったものである。

曲物の材料はナラ材と栗材であったが、山も年々遠くなつて、小国町や長井市の山まで行かなければならなくなつていたようである。

まず大きな木を見つけると、尺杖を使って二尺五寸の長さ、横に切つて行く。それを「玉切り」と呼んでいる。そして切つたものを斧で、ちょうど地金のような梯型に切り、それを背負つて家に運ぶ。それは曲物の仕事が始まる冬まで家の前の池に漬けておく。秋の刈入れの終るのを待つて、「割り山刀」^{なた}で一分五厘から二分ぐらいの厚さに、年輪に直角に割るが、それが失敗すれば、今迄の仕事が無駄になってしまう。次に「削り山刀」でうすくして、カンナをかけて、曲げの厚

さにする。

炉の火を真赤に焚いて湯をわかし、その板を煮て柔かくなつたところを丸く曲げる。それをハサミにかけて丸く折りまげたまま火棚に吊して三日ぐらい火で乾かす。綴り目を桜皮でとじると、底を杉の木で入れて出来上がる。

そこで、注目したいのは、むしろ技術そのものよりも一家上げての仕事の分担のことである。木を切り、割り、削り、そして曲げるのは男衆で、その間に火を焚いて湯をわかし、桜の皮を用意するのは女衆である。それに、子どもたちが炉の傍でさわいだりしないように子守りをするのは祖母の仕事であり、台所の片隅に、どこの家でも掘り炬燵がある。そこで祖母が孫たちに昔話を語るものだつたという。それは祖母の仕事でもあつたのだらう。赤々ともえる炉は冬でもあつたぐらいだったという。

当時の子どもの遊びに、曲物の小さいのを作つて遊ぶのもあつたというし、田の上で小さな炭焼きガマを作つて、木炭を作る遊びもあつたという。そんな風にしてそれぞれの持ち分で、みんなが労働のたのしさときびしさを共有したもので

あったという点は、当時の生活の中で大きい意味を持っていたものなのではないか。

炭焼きガマを見せてもらいに行ったのも、その曲物の話をきいた折の夕方であつた。メジロというアブが目の前をうなりながら飛び交う。小さいアブだが刺されると赤くふくれ上がる。そのメジロをはらいはらい炭焼きガマの説明をきいた。石ガマの下部に小さな孔があり、そこから丸太を入れる。「タテマタ」という棒で、ひよいとカマの中で丸太を立てる。慣れの自信が出来るまでの苦勞みたいなもの、例えば蓋を忘れたために、全部を灰にしてしまった話などがそれである。火の温度を色で見るのだそうで、火が黄金色になったときに、炭ガマから出し、灰をかぶせて消すことなど、一つ一つが生活のたたかみみたいに感じられる。

大平部落で私共のために部落の人がみんな集まってくれた。暑い晩である。みんながそれぞれ重箱一つずつ食べものを持って集まるのも古いしきたりなのだろう。冷酒を汲み交すうちに、熊狩りの話になった。その話を聞くうちに、共通の話題のなくなった現代の私共の間には、正常な意味での対話はないのではないか

ということを知らされた。現代の私達の周りには、仕事の分業化の進行に伴って、小さな分野の専門家が生まれ、全体を把握するような必要が、あたかも無いかの如き態である。したがって、「全人間的立場」からする話し合いは、互いに遠慮してさけて通るといふ傾向が強くなつて行くのであろうか。私にしてさえ、自分のそのような傾向にしばしば出会う。昔話を聞きながら、年寄から、「では一つ、こんど先生から聞かしてもらおうべ」といふことがよくあるが、その専門家（？）である私は、語り手になり得ない。それは人間として片跛者にすぎないことである。平等な社会などとお題目を唱えながら、その平等をこわすような、小さな専門家を多く作り上げているのが、現代の社会の実態なのかもしれない。

ともかく、村の人々が盃を片手に勝手に語り出した熊狩りの話を再現することはむずかしい。産忌・死忌を山の神がきらうこと、山言葉を誤って使い親方から叱られたこと、四月下旬の早朝、山合いを流れてくる水で、雪の上で水垢離をとる話、「山で手を組むのは死人と同じだ」とどやされた話、妊娠している熊は、狩人にかこまれる日には子を生んでしまう話、毎朝山で、磐次磐三郎に御飯を上げ

供えることなど、そしてまた「サギフリといって初めて参加した者は丸裸になつてチンポにヘラとシャクシをぶら下げて踊るもんだ」などという話など、延々と夜半まで続いた。

ここで注目したのは、家族全員がそれぞれの年令に応じてそれぞれの仕事を分担していたという昔の生活の在り方である。腰の立たなくなった老婆さえ、孫や曾孫に昔話を語りつがねばならなかったのである。そしてそれは仕事であると共に生き甲斐でもあつたのである。ところが今は「孫が大抵一人とか二人だから、語ることもなく大きくなってしまふ」ともいう。そして若衆が出稼ぎをしている留守番だから、老人が山へ行つて蛇にかまれたり、怪我をしたりするのは迷惑なのだ。といつて家の廻りでする仕事はすべて機械がやってくれる。草を引き抜く仕事さえ、薬がやってしまう。体を動かす場はどこにも見当らないといつてよい現状なのである。

しかし、こう書いて来て、私は決して山村の今後を悲観しているわけではない。山村をどうするかを考える視点にもう一つ、「坐り心地の悪い都会のソファ」に無

理に山村の老人を坐らせるような、そしてそれがあたかも文化的であるというような錯覚をとり去って対策を考えてもらいたいということである。

昭和四十六年九月

本稿は『飯豊町大平・新沼・高畑地区民俗調査報告』の中の昔話のみを集録したものである。本調査に御援助下された三地区の方々、そして飯豊町長さんはじめ役場の方々、特に広報の井上俊雄さんや課長さん、課員の献身的な援助のたまものです。なお本稿作成に当り、江田会長、奥村・千喜良先生に感謝いたします。

飯豊町（大平・新沼・高畑）昔話集

昭和四十六年九月 発行

編者 武田 正

（南陽市三間通二三二―三）

米沢東高等学校教諭

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊町昔話集

― 大平・新沼・高畠 ―

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年四月一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高島町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』

（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』

(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)

『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)

『お婆の手箱(一) 阿部キヌオさんの語り』

(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』

(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』

(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』

(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)

『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』

(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)

『飯豊町昔話―大平・新沼・高畑―』

(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)

『蛇むこむかし しらたかの民話』

(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)

